佩諧六義

粧束の杖

中小母さんは半そ自ら筆を執らまゝ所ゆゑ
さんと我集見所ゆゑ玉ハ書たる極は秘書
なるさんと我ゆゑ寫しく往来の枝となり
絶り路はちうまいとも世ハ爲要馬は誤れ
所ゆゑと信用なる壽をしめて明治九年
の六月なる日繁し

翠て菴誌

俳諧六義 一四
案方七名 八
付方八躰 十六
雜の巻 十七
冬季の格 四季の格 廿一
夏字夏語 廿三
韻字留才三 廿七
小留の傳 三十二
自他休用 三十三
人三勺附合 三十四
むすみちゝ傳 月むの傳 三十八
求韻俳諧 三十九
花小楼の附勺 附しまゝむ 四十
月の傳 四十一
三等俳諧 五十一
二ッ切字勺例 五十
二花新式 五十一
和詩の例 五十一
不易流行 六十二
真行学 六十三
曲節地 六十四

五猩及負事 六十五
當季々相の名 六十九
ふて尚れ傳 六十九
空接の傳 七十
[illegible]の前句に附句れ傳 手本波留方三傳 七十二
[illegible]れ形式 白いのむ傳 七十五
朧々月を附る傳 七十八
俳諧影曲流ノ傳 七十八
画賛案方の傳 七十九
手本波留方三ノ傳
秋の著猩句の傳 八十二
紅葉ノ発句ニ猩ノ傳 八十三
九月雪巻ノ傳 及ち秋の巻 八十四
素秋素素傳 八十七
発句八体七病ノ事 九十一
文の法
前書の法 九十一
比諭の附句 九十二
無常の附句 九十二
續月の傳 九十三
花の傳 百一
季移りの傳 百十一
月雪花の傳 百十四
文差硯の裏書 百十四
附句内外変化ノ附合 百十四
懐象れ法式 百十六
十九字発句の法 字餘りの句法 百十七
夏恵奉納れ式 附句の式 百十七
婚禮祝義れ式 百十四
追善れ法式 百十七
許情三ケの傳 百十八
稱法俳諧の式 百十八
昭句の傳 百十九
身三の法 附面八句法 百三十二
有名附合 [illegible] 百三十五
二品ニの字の事 百四十二
三品やの字の事 百四十三
三世しの字ノ事 百四十三
諸品の銘 百四十四
俳諧常に皆へ [illegible] 百五十四
迫文発句 百五十三
切字の一格 百五十三
やうなの発句 百五十五

附合不嫌ふり 百五十八
拾仮名 百六十四
仮名を書法 百六十五
姿情の傳 百六十六
俗語仮名遣いのる 百六十七
附合手爾葉留 百六十九
賦物の傳 百七十
和歌の法 百七十九
發句の法 百八十二
面八句傳 百八十四

六義

阿可波多の集

風躰

縦ハ河邊に人ありなす所の業を志るはしるの風俗
俗に鯽ありさてこそ有縁の人とする是主風なり
又云鯽を獲に行るを云風といふ也

其人の姿を水り桔梗う邪　亜祝法享最上子
雀小そあられまいとや鳴り鳥　自空居士　霞川

賦躰

縦ハ物をかりゆるまあまの指を略て折を以れを
言ふの縦といふ也又其指を一度に折て十ヶ枚あハ

するを心志の紙といふなり

名練名陸地名得たる　蛙の那　正秀

むぎ一ぐら　十　少を呼ぶ家案　若有

比躰

縦ハ自の子と佗の子と皆くらへ居るを其親の比と云之又自の子を見て他の子を思ひ他の子をもとめて自の子を却ふ是を切親の比といふ之

猿猴の枝から出うれ瓢うな　金羅

鮎鮨の生緒ほしてや杭のこ　仙角

真躰

縦ハ枯髪赤髪ハ枯草をよせたる是哉

雲真といふ之又ハ草の枯ぬまゝなりとて

石ハ冬すゆるのやうち是を真宴といふなり案

穿しさの腸赤しとてからし　居士

冬瓜ハ論語ハも書て豆腐哉　一秀

雅躰

縦ハ豆腐といふものゝ甘からぬ辛からすして

味なるを心雅といふ之又其豆腐ハ塩噌の味

付たるんを云雅とハ云なり案

鼻息の夜ハ何時り躰だと記　涼菟

神霊の馬糞り消てあハ生なり　茂乃

頌躰

縦ハ神農の美業を示して云ふの姿則
推頌なり又其万歳の目出交るを云ふ
しるこれを讃頌といふなり案

そもさに皆押あひぬ御迂宮　翁
神農の教ひ鮓り蓼のむ　楚山

其詞丸六義の口傳ふいはく

風ハ影を形ハさすしてあをとりて一つにしてそれをいふ

真ハ其のをとりてそれにふくらして影のんを形ハすこ

比ハ物をとりて更に寄れる云義を寄する

右風真比等しむに似ていきこゝかたれ有をいふ

紙ハ 種の詩り目ハ物を寄なるべてなるにいふの紙之如しも
物ゆゑる云義なるさう種之

頌ハ いまゝて神に中なり案

右其歌の趣之

六義ハ漢古までハ詩經に起り東朝までハ古今集に弘ル

風 諷諭之 風言(ハヤリコト)ト訓 諭言(サトシコト)ト訓

雅 正之 真之 正言(タヽシコト)ト訓 公言(ヨヽアケコト)ト訓

和音ハ真言(タヽコト)訓しられとも平話の從言(タヽコト)

頌 称之 英之 祝言(イワイコト)と訓

紙 補之 量之 筭言(カツヘコト)ト訓

比 喩之 準言(ナソラヘコト)訓

但比ハ物とりて其姿になそらへ

真 誘言(ナソラヘコト)ト訓 喩音

但 真 其のに托して其情をいふ

風ハ民間の語をいひ雅ハ朝廷の品をいひ

頌ハ君王の德をいひ

風雅頌ハ經になし紙比真ハ緯となせる
其六種ハ語面に明らかなり

六義曰

六義は詩經の語にありて風は民間の謡をいひ雅は朝廷の楽をいひ頌は君王の徳をいふ風雅頌を経となし賦比興を緯となせる六種の姿は諸抄に明也

然るに我家の六義といふは風は虚也雅は実也頌は万物の讃なり文の虚実は他情の事也賦は眼前の姿情をいふ比は彼をとりて是を比し興は是をとりて彼を興す是は喩の有無にして自他に拘の変化を立べしとぞ

我家の六義といふは風は虚之風を諷りその物に見えぬ雅は実之雅は正りて云其を和らし風は虚を以天に翔り雅は実を以て地にとゞまる此故我家には風雅を虚実の二用となる之　賦は眼前の姿情をいひ　比は彼を以て是に比し　興は彼を以て是に興じ頌は万物の讃なり文の虚実は他情の事なりと右十論の趣之

△六義　古今抄

風　ハヤリコト　風言ト訓スベシ

埋木　季吟撰

風　八雲御抄に風と云は物になぞらへて物をあらはすよそへ也

其事趣にてその心をとゞむるを云也

よめる歌は見と契りせるや柳髪　長政丸

山崎にて宗鑑の旧跡を見待し付

宿坊その香さへをあやかれ梅の花　季吟

夜話の谷響

どんみりと雨や樗の花くもり　芭蕉翁

賦

八雲傳おけり かそへ哥なり 心数借類無之とあり
ものをそのまゝにかざらずしてなることを述べしと云ふ案

草ておし萩荻すゝき紀葉きのこ　長頭丸

山の京や一見さくらふかのうち　季吟

あつみ山や吹浦かけて夕納涼　芭蕉翁

比

八雲傳おけり 比ハなすらへ哥也 なすらへまうけり
古今和比と真とを深清に先後の分ちありて比ハ物を
取てを姿に準へ真ハ物に托てを情を起すものを
倣すと物に倣さるしと自他の差別をわかちおく
なすらへてうや

川ぬく猿もしくなとふる志もとくつ　長頭丸

うつせみの和哥三神や月日星　季吟

みちのへの木槿は馬にくはれけり　芭蕉翁

古今抄　サソヒ言ト訓セシ

眞

八言ハ多くは哥なれ古今に三ヘ哥に同しやう
なれとも すこし法をうへるりといへり

語言と訓せん
月雪を考ふ語ハれて
優游自在の情を眞せの
謂なり

かりの秋風乗れこともなし　長以丸
をしなべしたとへはあハ乃内侍の船　季吟
冬瓜や五り　変れ　龍の皺　芭蕉翁

雅

八言ハ多くは哥なれ古今にはなるのとし
のなりをしたるを云　正言（タヽシ）と訓すへし

鳳凰そいそよ乃とまれ鳥の年　長頭丸
まさ〳〵といはれかことし玉れふ　季吟
此あるは推せよ茶に五窓一具　芭蕉翁

頌

八言ハいはひ言なり是ハ世をなめて称り

法ゝるなり案

伝あまはこれをとひ梅のきとくに　長沢丸

冥加あれなる者りあや兎をふ紀自在　季吟

蓬莱りゆのもや俳勢のもり　便　芭蕉翁

古今抄ニ曰今按するに六種の長なるに風雅頌の三種なるに

世界の人理を訊諭して関唯に哀楽をとてなふるが如く

王侯士民の心をはつうしめ賦比興の三緯なる昭界の

京都を頌詠して論語に文質をましゆるが如く多歎草木

の名を志らしむるにも地にも人をはる時は遊山翫物の

風姿をとてなる人理世務民の優賤をもふれは詩哥は王者

もてあそびなして天下の治具となれるなるへし志れは

純潔の六義なる地利と人和の二用より詩哥の名目を

ゆりあはせて其名にも同をしる時は引口をもはしれ

引ハ前ニ掲ケし六種ニ六色の当用を知るのあらまし也

一定也こゝに記す所の新製にも倣へバ和漢の学者ニ

学ばせて先哲の奥儀によるへし

讃岐に宿の夕日ちらばく
舞とのいふぞさて
老の目を拭ひ
解回説ハ昔句を見たし
是に先を極めて句より
分ハなれ行先も
付句ハ古人に語られ

△案方七名

五心　玄天　逆句　向附　拍子　色立　起情

白章ハ古人の舎鉄逆句比三ツを以案方の三法と定む起情向附ハ古人の名之拍子色立ハ逆句之舎鉄ハ時宗として尤ぐて小法る

五竹老師秘事書五心附合

昔句を情に見返附句比句なら結ハなして付心をいふ

数日ふえて十夜はしまりけ

子孝は罪を女房り泣く

仝

気もよみ下向もよみもして
詠の姿ともこちて出来合

彼岸も山は鐘の静さ

畑あり間へハ木情もと一里

男きらいの神もとの絶へ

山からすへて起さる依奴
火の段の体よれ楼阮

・仝

手造りも酒ありいさめる神あれを

算の新旅り衣のぬき足

出家の便り秤一本
仙うら蝸の如屏に松朽て

・夜陰の谷響

大名なれと墓石おかすむ宗

高人の掛したる門りかしこき家

新式
相玉寺牡丹の花の盛りにて
權のふとる花を遠ろく花の所の子

祖父と松母との中ハすれて
緣の香家の子の蓋に字ハ子
志て組ととれ切れる新

・會釋

ある名茶の二百日のふしきて
稍名茶之

旅人ハ口ろし夫婦にいつらしき

名茶ハ古ハ関より
花の子の縁ある書を
おさ大字の途
中より合ひけるを
すき情をかし略す
のと縁る緣そ神
すれあてらひ侯の
東方之
全ろ古ハ古ん乃案よ
例て氣向の怪あるを以て

ろふ縁を縁ふ類日

・仝

歌室の久仲梅凡居迷
雷鉄て明傳子の那あ究

可笑
盆紙

しつれい縁も笑しれ雑子

一代の存ろたんや松の音
あろうと松ちる蓮の実の音

女房の眉尾を再りとる兎うの

夜話の谷雪

濃りそめす兎も橋うら霧晴て

山も川もの餅り作りつゝ

逝勾

新しき秋風の永をこそうる彼の音

アリうらや白子若まり

天和とも日月星辰

東和税けハ下へ古ぬけ

水り垣乃木の花ふも生かへ栗

夜話の谷雪

住吉り筆も有て二海さらへ

雨もほろ〳〵り降れ

秘冥書

手造り此酒りいを飲る神なれは
積りしたれて通るむら夏

有心なる名之二字ト三字も延する時縁法之前句の終に一字二字の言便より情起し
来しるべし

起情

起情とは前句を飲めて起也
節とは飲て作る之 起情は重く節は怪し

緣日此鐘り如山は雪ちりて 海舟
前句の鐘と鐘のぬとを能
元宝て鐘くるは起しては
よし鐘のぬるなれは前と
なる之とて

十論の鑑あるに何也之人の
てゝしんさらん

仝

枯果て柳はすんと月の色
佐藤兵衛の内義なと有

仝

細 強てまつ川 樹の口色
立名のつらさも母の病ふから
太夕暮の時分か繋きと

五六本田中り杉のあつちこち
如来は狐に化されるやら

解ニ曰前句の何つちこちと云ふに作はなしさて云ふを飲めて
情を起しなる之

夜話の八谷名書

自古文庫
雲雀も揚る程の日なれは
春風より疎せはをしとゝ云ふ寒せ
注ニ曰前句に情なりはさるを作るなて情起すを

上書は男れやうに似せて書
三十日より御をあはしふ小拂
五行詠侍
寂ふたけるに此蔵そよく
聟撰ふ娘分限のうちまれて
仝
萩の招けて萩も熟ぬく

娘居りまきと稽せる事かなし
仝
那覇此中りのつ其里 鴻の島
古事をそめいき萬鶴長兵湧
右のやうに古と詩をつなぎ又月中に夕暮の時分を云分に
是を古事と紫ふ何るゆへ起請なり
那覇の中ふの門其里 鴻此島
萬鶴紙此 肩りし 手拭
右鶴の紙の附之大島の目立する男行逢と見立てるなり

是は時の多寡と算帰を分くるに洩らさずあり

円婦誹古語集　五升庵師伝

鏡へうりのひよ子鶏の只一羽

是は雌なくて諸虫をくらひし

師鏡前へとりよせて起請の紙にまかせて起請書の鴉を

人の心を知るべき理とも見ゆ

是は子をまれて諸虫をくはせる

是は雌をまもりて親をはなれ味とへし夢にて起請

子供をはなれ本性

鶏の時くる罷出羅成

婿取の鶏の声をつゞ

上総の夜の羽に鶏を裁り夜盛之一二字に夕飯の遠くまで

婿取の鶏の声をつゞ

無縁を乞ふ起請之と夜織つゝ

鳴く無り行きて鶏と此ふまで

嫁入とこそりの支払したつ移

又

迷ふ鶏の声も来りし

細雨の後をまつ継ぎとけし

又

無垣の薔薇り姫百合咲ひ
はなの損ふことを何ことしへん

徐風の曰起情の詞句高くあるゆゑ此の事は詩の喩なり

萩か根けハ萩もうなつく
姫思ひしはしと稱する高かるなり

其をよしとす其を是あの根ねと遥を見てさしく萩い根を稱えの名と
情を起しなるといへ是まも起情ハ表りて淮南の姿なくてもなら泣とそ

向附ハ前句を知りし
五人ハ前句を知らせ
ト宣すハ五人ハ咲を重く
見へ向附ハ道を深して
見へ知る前を説る
るまて五人ハ前を
見へ其とゆゑまゝ
あらは
前句の其体を思より
前後も物中も細かに
見出し我有人ト云り

向附

新しき
舊帽子思て赤貼る日神のお
白ようき女おとひ小来る
有人の前名之おあおあへおを以て
向ふ事し方之
鄙事を思ふるを嫁そしるなり

挨拶此部り来挽此は尤

仕の者を付せ是てや
是見いふ時ハ詞も改めて
評に是ある仕さし向ひ前句の結句をもとめて
自然に此の体形ハ有へし

仝

賛州此挽り治郎の秋を泣

部りしんを似ぬ不動院

物語の谷名書

諸侯なれど薄恵好なる里

麦飯りまさりたるは老れ情

●亀立　八夕暮

一里こちらうち見わたす亀山

自然る青田の中れ紅だらけ

伊勢れ山を田れ上まり見て

[illegible]

桃色れ嫁今通る日黒とも志ろ川の霞踏こえて

[illegible]

赤坂の名も折からふる雪ふりて

知行なやらいりれ亀山

青田の涼く送る一帆

[illegible]

[illegible]

むらり晴れる屏れ白雲出

[illegible]

日黒小渡賀れ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

●柏子

[illegible]

[illegible]

[illegible]

●仝

[illegible]

百ん云秋
よしに軽中重
あらえ木
まゝ長り酒二三盃をまつ里
七名上云軽中重
うきて
軽ハ逃句拍子色立
松ちまり凡浪たさし波
中ハ云秋
重ハ云起情向付之

一 延ひ縮ミ付方ハ七名まで工夫あるへし

・有心 起情 向付 縮ミ付方之　・逃句 色立 拍子 延ミ付方之　・人云秋 縮ミも延ミも

一 七名まで付方八躰に渡るへし

・逃句ハ 天象 時分 時節 用之　・有心ハ 人親 故事 用之　・人云秋 時宜 生物 定績 用之

時宜とハ無常の時宜にして人まで場まで一統七名八躰に渡る

陸山附句
夙を二つに切りけて立て
主人
十家盟ものちく内從の立申り
主物
・夜話の谷答
厨に見つけの車井戸
天和
夕立の付八筑波さをかられ
時分
鶴の起きこ音やがて暮にけり
時節
元せしと病で去用の時津凡
時宜
涼風に枕の草も床の雫
親和
生きも去にも金鉄の渡りをかられ
面親
稀なる惟定すなり頃になり
のふところ紙も打用いる

△付方八躰

・其人八躰 ・風情附 ・細附 ・遠附 ・心附
・お對附 ・切付 ・来附 ・□附 已上

・自他文唐
○徒の尖を待せ立てや　九折 此子附

名もなき世に吹捨る事　五下 九折 此号と付之

・其人
当術老荒にうち 此会合
いろちなる元有人の付方之
○異様へ金の隆斜寝けて

流りくも木枕の角色しなて

・之場
東海山海家内あるとなを
元ハ付 多くハ金鉄也
○板の間も猿の如く古寮好

湯あつる見れ箭り去の紀行の色

緑なる…ハ植ゑあるを以て時ハ今
奥やうして折ゝ通ひけり

門松も売りはぐれたる年の尾

・時節　○法流の例に涼しき菖蒲湯

春夏秋冬より花鳥暮正ノ行事ニ云者ヲ時節ト云り

・時宜

時宜とハ其時を知の時宜之すへて時宜残
旅するもの八卦をよみぬるハ皆時宜之

小野の鍵も自由の商人の鍵
之務しても毎に行きまる
高きもの高きに女房と見へし
枕草の男ハ時宜の
折ふし角り美濃近江も旅の居て
顔ハ通ひて時宜の一法之
高き代の詞をも…時の一旅とも
…時宜と云へし
八卦付方　廿首紀

・天相　○一通り山から時雨

日月星辰ヨリ風雨ヲ候ヒ…用と知へし

一雨も雪降る邪魔も通り一向にちされ
同耳の門の人音

・観相　○記念とも呂ひのけちぬ高家

世上ノ…観ズル心ノ葉ニシテ述懐ト知へし

ふく汁の鍋を行燈に提なりけり
千賀八屋も立て与力町

時分
黄なるとき之ハ星の明りの里

秋もはや団扇の表菖乃うら

・面影　○実盛の織…熊野もちうりて

古翁…云の人の名なとを云之

時分
近付く…時
天相
一さかり…
観相
秘事も…
双六
入道も御り…
寒玄
楠か建れ…
庭
節との…儀…

・時分　○暮るとも月夜ハ安さ　渡し舟

晦朔
昼夜十二時　明暗の

夕町　節も秋のさびしさ

十六返
自他相用
字賃客実
多少

異指合比肩よる事七ヶ條

附合の内

見聞法　作術遊　平懐　二句一意
始中終　三世話　右の沈句ある題の外を思ふ

[illegible]
名所の発句に季なくて雑の句になし
名所を季にして季を外し雑を[illegible]
[illegible]

△雑の巻の事

雑の発句梅ノ字三字季なくして季なき
こゝのよし

これしきもうさしうる世の精の窓かな

能き人綱をはらふ日哉

蓮二師

月と云ずに月を見ぬ雲と[illegible]
冬の[illegible]ぬ人と十[illegible]

濱東山一万句
[illegible]編

満座百韻　[illegible]

月花も[illegible]これなかりけり

右祢ハ中の雑も[illegible]

天地の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

月花ハ季なくて雑也
[illegible]四五の句をのこり
[illegible]月の[illegible]句月を
[illegible]

撰集の例
[illegible]

十八

二代目も絶えぬる程の酒屋哉　　探丸仙

菜十歌仙集の中

見渡つゝ程りぬやうれ今里
月も暈めして濁とお浴し船
月雲文庫
波音も静かに須ゝ頃ゝ夕の仮寐代
同だしも持ちて安お境界
木の枝りかたし二葉もそれ成り
松ういて候風れそよ〳〵
枝のやう里集

その日しかゝる一歩居
造化や山無心
云の氣ふり只
稚ふ平生　秦白

洗暫し去日の清子れ又彼れて
節るも閉り居らぬ拒び人
いはれぬやく旅のこうれ乳
冷し立西瓜を取し月れ新
小新　放されて脊戸り帰虫
貴の夕話お行山家なり里

松ゝ菅窪とおりても
そたるし
梅立や夕陽の智恵の
光輝花
ぬんとしに深名の立や
立の山
浴り中川午
よりもおそし梅車
矢と蒼と
鏡を立の三夕貝

東山十百韻

一筋の道貫おて百年忌　徐風菴
徳のかゝそのくり里お起新　子琴

其蒼花の庭なる雪の藤之
百分仙　緑奇行
此花にふる何もあらしむ紅葉　朝を仙
分かいらぬ自然　下花　松後
洗濯の水も豊ふ知らきて
今家でも洗うひやすさよ
晴くと月も霞まぬ橋通里
此花の庭なる梅
まして家雪の梅之

涼しさし脈傾く柴の秋らうり
枝ゆうきをまゆる夕紫
月も弓張とならぬ雲の影
秋たかし走り茄子紫
月と紫集　四時銀と号
佐保に花さく咲かり月にも
その空の葉をのそ館く
しらうさわらそれぬるのお顔して
京そ石ゆ月八まて氷以とも
何れもうも名高代の志うけ氷
新のあるに月の字ある新の格例

和書 ○月 秋
和之 桜

△ 春季の格 並 四季格

金玉遠近の虎月その秋白也七夕月まつ秋そえたしめハ
涼しき春季と真冬冬にも自ら秋の白露混
まさま柴

芭蕉の花寄の苔の常盤なる
ける 花まて寄もしく苔まき
常盤しきも別し柴の戸
ける 常盤しきも柴の戸の秋
是蓬生沢の佛あ柴
送り茶すまを自然り咲延し
ける 秋柴の枝抄を自然り咲延し

上の如き和柴の句を
秋季をぬきのくるる

青葉にて家より細るあれ柳
烟草くゆらせ薄杖の秋
こゝろ絹蒸ふんとれ熱なし
さとしはまふゆるむ余され
三日月れ角も松らく春の夜り
是恒む序の絹なり無雲の句ハ雜の句まで性り
雲節空へすゆらに句絹へしとなり

秘密抄
無雲は無雲の意なくて春雲と成る
年くや猿り恐せらる猿れ面
此話是や雲の詞なくて巣見之

廿五ヶ條曰
無雲の格ハ年々来去の絶意なり句面ハたゞ猿引
とも明るいはて年々去り来るれ意何れハ巣見之句面ハ
南雲を云はて無雲と云ふ雲の絶を無雲れ
格といふなり

四季の格

七浦や一字の影を一字へ

此龍は湖南の吟なり此格當なりと是れハ此格は句作去年して其季との格を附ても合ふ處是れ自在なる句法也

湖南老仙の傳 月の字を季と録し老の日七夕の月の空狂あれとも自ハ秋に結の是れハ春秋の外の季とも十七字は時に詠みて秋を暗くある句ふりをする句法傳なり先日の句を十分に句作りて其秋の季をあの和と入分て秋季を外した是湖南老仙の秘言すく今一世の手柄之とそ時に太世の統此傳を以て秘翁百字の西忘全玉集を編まれ老の今ト円に

五 今字の今と同士旅逸の秘事と云

六 さし汐て浪の花を 此次七句目の花を

七 菅川の紅葉の苔の花盛なる

此る芦まりて萩もしく芦まりしき

蓮りある芽を自粉り吟尽延し

此ー 新菊の扶持之

八 若葉しさも剃し紫の戸

此 ーーも紫の戸の秋

ゆ新する傳之

一 廿四字陰曰 一語結句を云ふ一語字に意を分つ

奈良七重七堂伽藍八重桜

七重七堂と詞を重ねる事を云

△一語一語の格

東の店選

豆ぶり豆ぶりの心

一語字は豆ぶ豆ぶ豆ぶと辞をちらして句を分つ所あり

和泉大臣にて山崎にて

山崎より 擬の

ふの為

為もいとて為れ

あと陰郎ふ 杖北迹

如

花の梳あひや之八重桜

八重家と法ぬ 釈切

家云 兔字の方云ノ所

〇 晴天し着ちよいと京居るし

半僕たり侍分に戯ぬ

今重観能

野の色の秋の縁のして花出

秋に来る秋八分之理経字

重坂北空や声しの夕れ 空

呼鳴叙字平礼ぬきて辟月 枕

静泉説之

あの宿蛙坊

君の影のいろやき月

生ぬりて踊の下僕ひ

ゑりまとも帰り重坂

稽考せしと柳の木より弓
弓法の新はむ元の貴しき

鶴を寄るし　山蓮の旅

面の生ひ無ひとも云ひて天の月　アハ　道人
東山子の簑に今祈る雨　子琴

五井河

夕くれの風より於ふや魚をくらん

右ハ芝尾の墨字口傳之
五井信り柳の時道人と
面をせらまし芝尾の寄せ
右寄せの利生まて能よく
面ゆりて以取恨ひ於ひしとも

けくら小雪へ年ゆぬ　中

雨晨河曰稽峯句は二句一意り墨む平句は墨て用を
かへて出るとの秘伝有里

平句墨字　菊の芝逸　梅似選

玉子真誠解ニ曰
墨語は詞を主ひ
墨字は意を分つ

角力取止めても去年の月の秋

枯れしくれの漏ぬ程澤

寺田無桜集　古里河撰
稽考せしと柳の木より弓
弓法の新はむ元の貴しき

仝

むら面をもて遥坂の冥

冥寺の小町は能の傳授事

蓮師　流し舟りしき

八雲やくもの附合之

琵琶の撥音を付てさゝ波

さゝ波や雲もちる星月夜

三日月も下へ付て雲もる初星も一様之

隠れなきたとへり照るや我宿

笠の紐緒も夏の穂隠れ

山蔭塚集

笑られし此山かげの涼しけれ

帰童仙

附に当るのさゝ波ハ琵琶の
拍子のさゝ波好の附合のさゝ波
を淡海のさゝ波之景色の
御ふ景色の様を見むべし

涼しさは汗をかくまぬ思

草の葉り夜間もなし露の玉

付玉遣の茶のまゝにて云業を定之

遣の家とまりてゆく中の栗

まことは言葉の結

三日月や名も紀山も三笠山

世渡りや渡りくゝし渡り鳥

付に法の御言の韻に
桜さくさくらの花の桜花
さく時ありける桜あまた

此歌の御さくらの一銭花へし

の文字を以て…ふにてまなを
これもおなじ字の哥を
みなこの初花の一類向なれハ
此法やなかるし 蕉の 落る 花の 終を 覆ふ なり

蓮の 柵あり て 哉 詠めて

哥と読の哥去と見てかくは読りなりとする也

新百韻

雁金も静りなりける八九月　支考

月は中秋十三夜の月　灰止

又此の集字を以て有

浪あつきなれど浪あふ云ふの名残して

浪ふくといへども浪和の鴎具

影見えて

新しかる月いつもと 松の蔭　不錆

雲の蔭をや溝のつめの縁　廿河

雲の実と実の月夜に書して　巴丈

十二夜話
おもひ白きゆへ文字まで居るを
韻字尚とい文字に依ありしを
字尚といへ
是は針小作述の爲なり男山

△ 韻字尚第三の事

独吟他

冬の日集

霜月や鸛の彳々並居て　荷兮

冬の朝日のあはれなりけり　芭蕉翁

樫檜山家の体を木の葉降

ひきずるうしの塩こぼれつつ

音もなき紀具足り月は殘くと

總前一世のうち 宗匠は此書に據るとぞ

独吟ふまつきぬ
影も…行まで
忘れるまじき
家の嵩へも
…紅葉
針草 楷草
。
手向もなくふるの全
すしるしを
深くる名の景
たとへは
明白に漢書の字も
大和仮名

小河の窪を越る

即ちり黒やうつす新清水　助度
主ふ君扇の入天気まで　桃隣
業平を思ふ鄙の都　等躬

家より東須我祖の神ハ十月も　五井府

ふ易をふとき松の時雨の　朝夜

壽いて菊を菜の銘を露の畠　木北

地ひり花ふつ君おしい男や

をとり乾柿使り此ゆかりハ

黒髪に伊達の薄黒の神と山
黒髪に伊達の薄黒の
ゆりゑんせて
守ふまゝハまでの心得ありて男山　新宮ふハ留りなるから　ゆりゑんせてとんのかまふより

ゆるまりしと此まの宮に心得ありしをとくハ

海蓄まるまゝ吉田も南年も

紙衣の味を人ハ知らせや

恥しく然ゝ我思れ鏡山

或人問此守三までの心得ありしかまをや蓋白海蓄まるまゝ中まで口合の切字を今吉田も南年も以ひ於
ゝる句之詩に紙まで志るほやといひ捨てれハ守三に例の本質ハ極めてなりうるゝ紙句の切字も有てなお語
語の極字なれハ紙文とり志留りなる句雑之志るによりて小てのこと語ハ色も角も守三の働まハ恥りしくと
切て頌くてすれと志のまと紙句
紙の深さるを知おさめたる働ま
をしるべし是ハ法或をたつして
たつさぬ時宮の働まともいふし
粉口傳

壽ゝ庵杖の迹集

先鶴り屠も越路へ向ふ里

志まもなく里友まもなく里

[illegible]

霜くれ見ハ老も忘れくる　一曲

あるは男ニて留もくるしかるべし

立ちわれいなかの山の雲かな
生る松としきりてくり　仝

かくりこん

笠の緒とり捨ともありて見送らむ

[illegible]

こゝ[illegible]　志れ都人なれ

[illegible]

[illegible]　指合せて隣[illegible]ぬ菅　畑

かくさしな
十六夜の月を問ども　杉二

冷しき夏
[illegible]　皐芳　仝

老の[illegible]　深草の志ハ散てこのかた

かくる身を
いかくも雲の旗衣　[illegible]

一巻物の中
千三の韻字留りは
熟字をとりてあり字の
通用　[illegible]
古俗用る事　[illegible]
[illegible]
留りしを志れともたつ也
と云る　まる有
[illegible]
百千[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

鶯は笠かりて時しも

[illegible]

[illegible]　仝

[illegible]

杖の[illegible]れ[illegible]

苔界とて[illegible]

[illegible]

[illegible]

五月にて留れるべし

内姫頼古路集

連り来て唐の綱雪うもやな

見さ行ゆしに月の出るを

汐のさ出度り絲出む一ツ岩

是以来何のさしめて文字留の才三仕見へられし也と云

自然文庫

かくろきも清る宮らぬ帰所

いろくに推茸松茸樓茸

櫛入まで地ところの髪を水鏡

西の宮集

慕ひ来て山郭公雪おの那　小志

旅の風雅そ好性の狭にも　古梁坊

佛移り雨や通らん洗波籠　文柳

右ニツ和

大垣にて

嘗や解り二夫は五十年以一の　陽童仙

自然の来れ見も有ら終も　梅夫

其川孫り悟いえ世の乗離　柳巴

久さしき所望の今日を閑かも　梅二　五孫与猿とも依名当なるハ第三表字当組例之

冷まり置うさしけしてて　文柳　左氏附中右の秀逸之と云所詩に宜ひ作る

かゝる砂ハ何国も霞の　旋衣　左柳　是をとてまえ名の組織と云ふ也

祝ハまて蓋り咲く名も櫻鯛　除風居

元治元子年　皐月

大垣にて　魯松居級の中

雨乞ひし池やみとりは冬とて毎

名も猿丸竹は雲の化粧り

蒼うまて清りる噺も生記録

日月　伴尾　進木居　旧里夜話

昔ゆうし宮橋銭　主と見えて　魯松居

名鶴も叩け居の扉銭

降り出して雨も静に離れ鳴

宮望塚

吸や蒙　積へうりる夕暮り　其吹

望るの　猪話　家になるねと

和らおて泉つまきは　敬　亀

一、續集

きくなば
萩の戸や簾の出入もその通り
露も流せり心あねハ
雪月に標那をきられ追手加

一、三秋拾遺

孫四郎子折り笑に百千鳥
廿様もほり

一、秘蔵桜

一本り流れてる名や桜鳥　桜
貴妃も小町も雛の容　顔
人中り尾をあめる　麦鶉
ほてて鳥をしるのうち
孫りさく絶ゆる月のうえ　食
山鳥の尾の長き夜の月

曲斎松

梅風の性や色々の紙の青に
林の風なく虫の音の[illegible]に
役に上すてるに[illegible]を[illegible]れ押字あつて第[illegible]
秋風の性やとすれハ上すて切字あれハ押[illegible]ハの字に
押字之秋の風に休め日の出や[illegible]は行せん[illegible]
切字を含ハ文字[illegible]上の[illegible]文字[illegible]の[illegible]句[illegible]
す[illegible]し

押字
ヨハモカラス
[illegible]之

△小笛の傳

ハ文とて廿四字の[illegible]て押
[illegible]て第[illegible]なり
小笛字まて[illegible]に文字より上へ[illegible]返して
[illegible]の[illegible]と笛れハ四字ハ[illegible]中に[illegible]も[illegible]

日の出や[illegible]は行せん[illegible]り

[illegible]の
小文庫
何れこれに猫の[illegible]を探る様なり
[illegible]の[illegible]時の[illegible]て[illegible]月[illegible]けり　[illegible]水
牧の[illegible]り　翁
[illegible]小笛なり　小笛の[illegible]三[illegible]
下[illegible]には

月日ハうえの空すて消えにけり。
[illegible]り[illegible]
月[illegible]り[illegible]なく[illegible]る　秋[illegible]
牧の[illegible]り[illegible]時の[illegible]て[illegible]しさ
[illegible]く[illegible]し

後つけて出されハ月の姥捨り
[illegible]の[illegible]を[illegible]毎[illegible]
[illegible]い[illegible]も
[illegible]て[illegible]
[illegible]し

ほととぎす嵐の出行[illegible]年なり
[illegible]の[illegible]嵐の[illegible]り[illegible]中に[illegible]叶へハ第[illegible]

アリノスサミ曰 躰用

先躰とは山藪
なとハ岸嶽 体
谷等 水辺
又海浦川 体
故等居所ニ又
家軒屋等 用
村町なと皆動の数
扨又躰ニも
用ハ躰にまつハりて
動くものをいふ也山野
なとハ滝桟等水辺
又波潮居所ニハ
簾戸等之

体用の事

鐘消ても花の香ニ之て木の下精

庵主も留主も松の戸の明く

青葉之不審のうつる影哉

迷出海曰体ニ要之黄之用ニ姿なく画か黄之

先須合ニ而府身一不見極め一毛上来迄へし

其里

又躰用の事といふ事有
山野ハ山姫山守立実
水辺ハ舟筏等
居所ハ家ニ水鉢
極込大ていかゝ也
致之
此外ハ躰之用
用之躰 用躰之
躰用之外仕立ル
躰までも用までも
出離る不足之躰
用の外の事ニ付ても
付ても不苦之

体用之変化也用ニして去嫌といふも変化也

用之と其先体と用とりも体用とと付へし

体用之遣ひ方も有と云なれとも又變化すへしも

木のもとに休ひし体なし依て何程とも体を合

句作へし山家も姿あつて体之依て是は

用我句作之へしと其

古人 要二よる也 口授有り

或人曰
仙階に　用
サビシヲリ大変之
コレハ不二なれ其他
二ツに分ルとまた
サビを用名之　体
シヲリハ独之と云
題事編　自
意匠ハ体也　而於則用也
コヽロニツクル

疲骨も得る起かをる力を起
隣をかりて車引込む
うに人をきゝ恒よりくらせん
分やかなれ刀をし出せ
テニヲハハ

△人三勺附合の事

拍手おしく諸歌成就
世を思ふ編笠を引と下り宜
二葉以外傳三絶て久しん
全
糸よりの業にも細に貸仕事
菜りしてはす結眠り癖
笠解て居れとも持て来れ

仙階地かいふ人之
拍手を打居る之場へ
来る浪人の体之
之浪人のいふ言葉として
之浪人傳三低頭平伏
姿形なり

遅来河

・仝

踏んでは汗我細る夜米　　朝伍（綺景山）

然知り此果とて人此可惜之里

登見せて棧のうち呼ふ

・耕月居・春無選・仝

世を逃て無心に繼る月の歌

立家のうち吟ぜる詩織に志んとして　　耕月居

彼岸今もしも老の西堂

袴長此子の持て出る酒

和中我乞へと蓋へば暮る秋

踊り強此扇を冬も獨ふさし

・仝

木の雪に刻と川柿此木雪　　雪二

そしらるとも知らぬ老の慾

嫁とはなれと落付ぬ風

詩處へ占ひ居此事せらせて

・仝

一説ニ曰姫をのせし附句
いまでは人三句になれば
此如へ占ひ居をおしゆへ
人三句の附之とて

帯りて呼を賣る事 弱

河波 雪

楼付て手れ引れさる釜の下

こゝろくの音 怖き 雷

五升河 ・三勺変

西井河

出来て来る鞠の袴の慈て見るん

元服しても中法慈尻なる

堪忍のんれむと生しなるゝ

徐見河曰元服の勺を河となる楼を付てむの勺ハ子供をおまに口論なとする事

まさあらすと附するを

・仝

職なしも世ぬ機生て節勺前

そこふあてれハ度に乗り桶

泣るも上手に出し事加帳

夢ことせ集

手の内り更能ぬ極る古刀の出来

男産めよと女産へ無理

よん連のあらハくと河漱詰

・仝

のこ込切こ水玉の揖取

西岡啓

むかしをかしかりしかはいへば笠風もも
妹のらひに海の末にけり

婦妹に備習なきを
しを合ふて浴ふ里
此末顔の句まで峯句
も雜の句にてすると

●雜の句

茶り酒は詠め此外の花の紫　雨長房
けまは造化に拓ふ明音

頭書よりも軍出りかなし芳里山　蓮師
其名は柄は茶り紅葉り　[illegible]
秋境蒸れしいてく幣は花の紫　遅朱房
白ふ朝日りし清ま水　音

此ほりふたりは[illegible]
[illegible]入らぬ自然　[illegible]

△求韻俳諧の事

日
求韻の成目は真
俳諧も二種の
韻例ありて文句を
麁韻となし言語
を細韻となす
麁韻はやまたま
の青韻といひ
細韻は八を八の
六字をいふけて
韻の求韻は
二種三種の花の
ありて短韻といひ
七韻といひ雙本
といふ時は短韻に
準ずる絶句也

和漢文操に曰短韻行は四句三韻となし韻四句は六
句四韻となし七韻を八句五韻となし時は四六
とも六ことも六八とも[illegible]時に一篇六章此特ありて
韻をかゆるに換中にかゆん志うるに百韻の場は中間
の十四句を八韻となし[illegible]八句と仮名の一韻十字にして
句ことに不自在なりんまは志いてはなるの沙汰といふ

無し

・短奇行　四句三韻

香久山のさちらに千世や蔵のむ。
鶯もうふ局折　出てうる。
扇とは雲汲むてふ名にあてて
湯あらしかるに簾をまけハ。
裳束は何れと余所をゆす合せ△

和漢文操ニ曰
韵の無細を論せハ
「両韵ハ身も花をの如く
「無韵ハ かるも（芥藻）　たまのを（玉緒）。
のことき　或ハ　とくるを（徒利）
（沙沐）ちちの韵も仮語は
韵に音便かちなれハ
家に同家の論を定む
へしあらず和漢の韵例
も同韵に同家を用たれハ
今や仮語の韵或ハ
かれとむれとの無細
まて同家家吟の例と
以ハむ三条ハ　夜ぬ早ぬ。
のことき古例の用捨を

此字句よ楽韵を替るなり

・彩仙行　六句四韻

行秋の月くこ月出あるかな。
赤瓦山より蓉夜の志らむ。
物衣いさ雪の雪を詩かけて
猫殿なふるもや食の中。
一本の扇より篆笥にねかへし

覚悟すべし或ハ一篇に
同韵を用ふるも生て
一二韵を居るつきまや

出て見る影は見あり作らる。
松の木の皆れ立いを捨ての里△

略

、日出文庫
求朝附合稲ヨリ初ルワキノ留ノ假名ヨリ短句くと動字を
請ふ勿論中位ヨリ付と動字ありテ請てよし　八本ハ口傳

△花ふ桜の附合れ事　アリスナ三日　花と云詞に桜ハすへし　桜の詞に花の付せん
夜の蝶てに家の茶も咲せけり　徐風居
明るさや本も咲り句ふ付　三洗

、千線集
花の心も薫す　僕人不偏
四方の桜今す道ねとも

、三歎合
桜主附る
舊茶ふ所延ハ
色よう情ふ風
桜うけて
皇ををく
紙ちり奈良漆の客を驚すし　廷元

仝
二日醒さめぬ出ハちん
桜もて来く
起てさ来　桜ふ納ねよし　惜くとも

、桜ふちの附
桜　咲けり二十八日
法の声手盗人といそれさや
、傳　法の声なれハ生木の　おとふ手弥なる　る附知へし
山寺暮家あすまて花盛
川も美し桜継兵衛
、傳　桜継兵衛と人の異名　なれハ古事に付　あらきの花ふあらん
世を捨り出り　さくらの木の下　古朗
花の香するそくくの水　松兄

、古今抄
辛崎の松ちも星織まし
山ちきらうを志目るちる雨
秘事抄
口傳松も雅として
常も用なる春桜
う付く
花よ桜附るに八吉野
花衣花の神とふ如き
物よ桜とよの桜を附
詠の花よハ桜　鋼桜人
の如きの附れとも
無流よハ是を用ん
花と花桜ハ桜と
分明ふ附るを
るとする

、吉野山
花の附
、傳　吉野山花を付なら
墨衣あの世の法の
花盛なれハ別祢
なると知へし
吉野山を奥ち辿へえりけり
墨衣これハあの世の花盛り

、吉野山桜
詠とく首もいし首の眥
かけてこゝる山桜人
桜さく
吉書出家り三吉野の苗
、傳　三吉野の苗なれハ
花ふ思へて　出家も
仏もおりお祢く

太花の正字よなすらん嗜の声と割くの理をよく考へ付るる
志りし印者のするる　初心のするるまある

一句毎に月ハ月ごとに延すへき句に字をこのみ新を
求むべうろ經と之

△月の傳

徐风居

五文字文注
總て月を詠ずる事
天和の指合に據らば
前句によりて強て　月毛文庫
月の引上をば附べし
五三句引上をも許す
み空住はるに　夜見前の月　いかもの、字入りて句作るへし
月の影しるし
尽きにかゝりて詠ひ
又月を見るに　時刻の月　赤越に時刻あるを月に昼夜の文字出へからん
法を入れて見るへし
月夜の月ハ　星合小月　星合ハ句ニハ月の紙出へし一句の沙汰あり
捨てを添て付るも可也
定住なるハ現月にあらずとも
よく詠せハ現月句續也　證句
み池星の出る　星あふ川　梅るや露に　時ひ合
前句にまして前にあらハ

前句に季を出すへからん無名不出前句の月抑て引て抑に枝に月を出すへし
えもしきのるに登れ頭
前句異名の付
前句に見る月の
字を出す例
詠める集
　月に無名所
　　證句なるハ一　登り一所なるへし
眼前して見るハ玉兎の眼となれ　一宗所
　月の名所
　　月に文料　花に芳野を付へらん字は
此頃しの續く長月
　　月菜　龍田に紅葉なし
蕣の葉
　月並の月
　　照る月の星あらハまたわからぬ人物事
霧の名は玉の兎の眼を詠ミ　耕月居
咲て籬も萩の長月
　　毎し
二河の月雨
秋月のうちハ坂の夜も
　なし
　寺田に波も志賀乃門せん
湯の山に枕寫もすゝけに一宗所
是も一枝之

六月は汗を一時に出せ

梭そ逢

月より蛍　蛍は其そぐそ付る之　山の陰　思隠　木の雪

川上へ海ゆく風の有るなり

自も木のうに晴ゆくる梅雨　雨晴れ　水上あど軽きそ付へし

自より紫　蛍は主の如し

谷川や紫より深る夕何かし

自は紫も簾まくし　亭

思隠は蛍より波は上里

孫はきりんの涼しさは月

雪雪の越　おりの雪雪をこけ行衆威雲をそこせ小さき秋のと

氣殺をふくめ二つまて月をそこせり

まをそ逢雪雪を月と勾ひ給るその大きなるを細法なり

小さき萩の風はよ起立

此格を能使へ雪雪は逆事の時を起をそこせ月と仕立てり

物更勾せる事二つまて月をそこせ八月と月の字を

ひらせる

八月は梳却し給ひ小蝙綿

雪雪は月ならねと

小萩風の三字を行ひらい

て月と成れり志ううは

雪雪を月と世をうへ

霞う山の端ゆ此絵の

月を縁ゆる象物

みハてうおはの

今新まて月と成へし

そこに三つとりへせてとハ

二を三月の沙を以て月以

の月に月の字を使ひて

雪雪と小萩風の三字の何らひまて二つの中に月を隠しなる之

月の字より　月の論

發勺

六月や峯にしてあらし山

此巻の五勺目より呉名に月ある時三日に新
既望 待宵抔の都に浮まなふ草月雨に月を嫌ひ
却(サミダレ)も雨に嫌ひ給さみされハ仮名に出る故なり
和月菓月と訓ふいふ時ハ嫌ひ二月八月と音に
いふ時ハ月に寄なしきりもぬ筈なれと月と

いふ字に姿を忘れたとえ

星月夜

秋にして月なかれ夜勺より星一二三ヶ日あれハ
さて三勺目又赤秋なれ七勺目に注まて
他の季まて呉名正しし

鶯の月日星

花にあやまて月にあらねとも是も星月夜の
縁にし住ことは祭

晴日に月

何處も烈しく奇せる年彼
神燈の新に徐夜も三日の月
雨小月
慰見うゐり面に長の春
菜の裏月の拒ひも折返し

跡の思ひ集 再和歌

古今抄
あつれ雲
さしくる上もありくす
かるふく月のさし寄る新
前々より星月をいひつゝる例
雲間りく九条あるり此芋のあり
人のこゝ後の月見なりけり

溢れ月の事
去越日新あり前に月のこと云中の今をしてこゝ後に月をせねばならぬやうにて
溢すを習ひ之六日目の人も松の日三線
やめて前の下の今の心に二百万に偕ものも也

万葉拾集 万葉歌
掃除日の深き深不化のうれ初
笠程さ秋も家中の梳ます也
月待うれ山てこそあ也
さらへ人の世にのれはこれ放し者
松もそ雪の
月を待ふり
玉の出てこれの雪甚ち前

耕月詩
あらこうゐの芋ハしくと賣何りき
鉄上の柿を掛ゆる畫の元
徐へ浴りとち洗の新
そ雪の月の名はかれなし

日
松虫の傳は鈴虫 興虫
月の文科人さへ浴む
前々より星いひつけおうら月に趣向をこゝる前は

彦星のやる瀬月の巡る行
まる枝知ら手秋の七草
明の空の日をこれも巡る光丸
皆月の句なり

隠て出る男鹿の山の端かり

月も嬉しと知らしめさらん

月は星前句ふりさを倒

引際と締めくゝりぬ
佳作
並木へも刈干の稲
かけるなり
かくすも月の山へ
落かり

又

芋の子の白い膚に
こらい合

年よれと宿の鏡さよ我知つゝ

月をとゝめ
名月立る点

素性の寄ふさ行る長月

腐すな網絡かとも　翁
らいまや
ホラ
羅ことしも荒ぬ友　三角
祝ぬ月
新旅
築入の色つくまゝに　仝
なくらいやんと
葛うらさなし　翁

仝

千あくと忘れて露りぬらしる里

門よ遠さつと知のふ月の夜

此所寸る姿情の事用ゐして千あくと忌との紫銭

なるへし無して溢れ月の此寸いらる立るなりまる

も高れ宮の道理知れを急ぐ情のまとい知らぬ

とはれ人姿の理るといふへし

月の一字より隠見の事

此格は漢に月の数あるから或は数字に接合の或は其象の去嫌まで月の時をいふ事あり早竟は月といふ字をかくまとゆるまとに二字なし案

月我あるまと例

朝ぬるに鳥もかよへ浦祓川

有惟子に笠の夕葉

見浦さは去も有紫も立てつりに

夏は去とつと斤笠に浦の月

月をかくまと例

秋ぬ川や朝日汐の星志らに

はりく松に長に稲の鳥

姨捨に奇まも誰も袖ぬれて

杖の迹

壺々庵洲

さびしいはれもや売れ行遠路
かくて常れ千里秋なとも
笑しれ宮ゆ風と寒からし
高けれは呉狗の十六夜
稲葉も錦と云ふる秋の中
虫も思ふの是の夕なれ

此際も一格あり柔

深川舟集之首

落合の河行月の俳句
落ちなれそと離ふ浅瀬
月の雪草は何かに行彼らく

仝

空行て帰る霧れ像浮り
淡路絵鳴もされ宗先ん

いつまで細い峯の三日月

稲妻小月

稲妻や浜まで消て松の影

底的の影の鑑り続紐

稲妻や山を落させ見明り

月も子厭の細り斤破

右の句は淡月の待ふ添し実は五悠足し

松十論　龍沙紀

山まく雲の端りに日のさして

内てらひも旅た紀紀

秋もとや旅り沙を立し々里

便しひ中たひろむ弓張

八條目

枯枝に鳥とまりけり秋の暮

古風なれは

鳥がとまりやと云べし

中古宗因が此の枯枝

なれは

枯枝をかけても杖やなど

いはん

△三等俳諧の事

柳子嵐やうらも尾花かり枯の風

是蓮二の時代の句也

梅の花咲し花の都の形

是も他門の俳諧なり

柳子尾やうらも尾花の枯の風

是は其角時代の句也

梅咲て咲し花の都の形

是も江戸の俳諧なり

柳子嵐やうらも蕨にまゝる風

是は当時の句也

梅にまゝ咲し花の都の形

是も西門の俳諧なり

名れ云等は文阿弥の作なりと要ニ下りの口授
なり

△二ッ切字の入たる發句の事

夕点や秋はいろ〳〵の飄うな
桜白し白あれは神の心う那

ハの字まで抱へねはならし上の切字ハの字まで消ゆる
法タ下の切字ハ皆いひ来ける字之

内懐歌仙 五竹師
主中小分ておとれし
白牡丹
赤牡丹とは敷へ
姿の
神も
何よりも心の色の
黒うして
名物も
宮は又姿の黒を
たのしまして

△二花新式附合の事

五竹名所花ノ新式来る記事
合見ゆへし

菜の湯といふも是是の事
肩衣より花も咲うねを世を捨て
其の拍子の山志川うなり

經奇切三種の付
神祈の黒又名物の
色小勾作何ゝ付ね
神祈の黒の勾を肩衣より
一字一点も立ち候
むし付る例も有へし

玄冥廣く火袖なうもる
ふさひ黒の咲ましを

柳山吟まりをくしまそ

△和詩の事

・嘯雪舎四詠　鶯　有夢

行ま柳に雪は降なうら　其志りうれの雪れ鶯を
蔵入れ日も只袋をうぬと　笠は名に如ふ柳のむかさ

・郭公　万葉韵　童平

そよ子規松　此法れなれも（肝）　稲葉の秋音雲まかしさ我（竿）
我も山路に日をやくらさめ（雨）　本と里は鶴も世ぬと鳴らん（蘭）

・鴈　二字韻　里紅

鴈も蔵るは窓なりぬこのも（年麼）　波のうも名を人に志らせな（白砂）
むなむ里の無筆なりとも（成共）　吉法れは風の萩さへいのに（素何）

・千鳥　志名ノ詩　蓮二房

今宵千鳥に泣ノ詩ノ冊ヲ　妹許（カリ）行身ハ可レ有（カル）憂

誘引去傳砂子跡ヲ　真名ニ將ニ汲ニ御裳ノ流ヲ

本朝文鑑　四季花鳥

花　　花仙

君見よや春と秋と　花はけハ葉ぬけしとよ
葉ぬけちハはくへまに　むりなやむ我こゝ

鳥

夜あけく冬はむし　鳥ハ似たる我ぬりし
世ハ何かこれむの　ゆまてかへる古葉あ里

獅子菴ノ三詠　七言

松

松とあそへハ松も寒はめて　我をむりし此なとも我ぬりへ
ゆきの降る日も月のてる者も　行かあるねと君を忘れぬ

菜

日光山

二所れ山の根を動起れき
代を見そなはれ八の陽と
竜は諸侯金のしらし
風は雷なるおのきたれし
帝の御切りうちまつく
夫の貢徳を行ふけり

江島

江の島は絵のしまよ
[illegible]
[illegible]
浪に少く琵琶の音

桜は大まし詩は忘れたむ　菜は何とその歌にまれぬ
面は清しき俗語をやめて　豆腐なる者に書をのこそなく

笠

笠は名を知ふ法性なれと　利休の家の好奇も何らしを
我と風雅の旅に拵て　もれ婦まのよし世見せうぞ

和漢賞花　五言律

花はよしもなりつら　見る人おなしこうりは

あるんまは　妹様むり　けくらまは身あれふ
寝　唐にいさ芳里あらは　されしき我達にちる
前　きれしさを鼓に清き　詩を清くり歌よりまむ

和漢賞月　七言律

我日のもとれ名月のあれは　り給こし人も皆こちらむく
詩まは波間のあをくまて　哥に本来れもやちるらん
雪の山陰の友を望へて　家も更料の姫そなるなる

けれ杜子美の国にあるにも　芋とし見れハあるも思ハれ

・鹿花左仙花鳥詩ニ有感　三五七言

むかし　此詩あり　其の人むかしく
今しも　むかしの　名のこれこり　ぬ
はかれ　蔵るとても　まる　けくへにふ
我も　鳥に似て　花より　啼らん

・送ルニ越ノ左明ヲ一　三五七言

こゝろし　桃の花の　雲に　あらしく
いほる　一けしの　舞も　けくさぬ
今しも　松をけの　まりとに　おくと
人我　秋の雲に　もとれ　きれ

・和漢文操　一万葉韻

松に初日之此年をふるしも霜　おちふ秋の日さへとしかゝ牆

法れなにきふれなにありとも 友
これて可なれ志る御しんを 素

・國君を祝して　　廉安道

古風されしさを神ふ法めと 蓍
ことしは身もあまりぬるかや 茨
我志し山もかはこ於めてる 足
めてたんは国れ民は生れ志て 柳

・一万葉躰をもて一万韻の筆をこころむ　　毛揚子

てはこはこ小蕎や瓦かふ 買
我日の本れ御そ生ふとき 解
筆のたやしれむもはくらん 蘭
硯の海れ波は志りふ 蟹

・因家ノ恋　　蓮二房

法をとめれ名のいふ法ぬけ紀 露濃
むもかりしれよしやよれ中 俗中
法ぬふあらぬ沼のかけさへ 郭副
鏡の山れ於こふをつかし 慙通

・怨 名二 七夕ヲ 恋　　廉安道

ことひ御身の心としあさ浦し 浅猿
何のこきむ星れ於らこと 虚言
人の祢のひの糸かなひなこそ 葉繁
いうふ一巻とちさ星於めてる 塗搭

・老圃ノ詞　　岸昨裏

我をかじしと人の見るのも　可閑
雪に志ゐれに笠のあけ〻れ　旭曉
猿にはゆられ老ひに生じしな　来品
ねさまれる世に山田もるてふ　而云

祝ニ叶餘一ヲ　相左角

その葉は君の為とよみしかと　廉
蓬はさふの餘に法れしを　塩
名も常のいろにめてたむ　剣
けにむかりと見れば見あかぬ　菓

詠ス梅ヲ　高左把

梅よ　先ひらけ　みんなこれ　えらく

雪の　降とても　まめきなつらい
閑は　あやなしと　きれのいふらむ
窓に　香をゆゑる　あらはきのたれ

鶯　擬ニ古辞一ヲ　渡白狂

寄うき名の梅に飽くや　行を一番の春ひ来とや
梅とひしとて菴に鳴日も　行かはくちぬちきりあれとや

師走ノ朝寝　仙里紅

身は桂柿の餅も清かねと　春まち顔の梅は咲てよ
闇よくらぬの坂も越へぬは　世を志ら川に漕ぎてるかも

年立帰る春のあしたは　春柳は君の名も老せぬや
夜の薄り残秋に鞠まて　雪に月かれぬ者の示しさ

・雪井

化粧はて山に雪女ゆへ　朝日さす追来る雪の井
さへは君とおもひ合ひて　世の憂まぬしは知てあるめ

△五音

アイウエヲ
カキクケコ
サシスセソ
タチツテト
ナニヌ子ノ
ハヒフヘホ
マミムメモ
ヤイユエヨ
ラリルレロ
ワ井ウエオ

、ア阿音
称男声ト為開音
是ヨリ四十字称女声
ト為合音陰声也

、イ伊音
右ニ同

、ウ宇音
右ニ同

、エ恵音
右ニ同

、ヲ於音
右ニ同

、竪を五音と云
、横を連声と云

△和詩法

●○イン字
●フミヲトシ

・五言絶句

●一
○二
●三
○四

・七言絶句

○一
○二
●三
○四

・五言律

●一
○二
●三
○四
ツイ
●五
○六
ツイ
○七
○八

・七言律

○一
○二
●三
○四
ツイ
●五
○六
ツイ
○七
○八

以上大畧

・字對ハ文字ノ数揃ヘル

・句對ハ山ニ川何ニトツイスル

・意對ハ長短ニ不抱タトヘハ松風ト
村雨ハ中ヨク孔子ト顔回ハ
中カヨイ

・俤を負ふる布袋の賛　五竹師

浮世の事に捉人なるの良
年の用意も市に立てや
負ふ袋の言ふ姿も
いろ色に分る富貴なるかハ

・画賛五絶　仝

黒木賣しし
もはさふと同人も
志ほらしく帰り向ふ
黒木ありしし

・義士　雨岡仙

色葉の義士も心なるしく
衣を裂し志似るなるなり
朽ぬ名を石はしめて
麻けハ玉と代とは光かぬ

二栄府曰

起請將合とて將ゐなれハとてもなれくに成てハ不宜

所ハ尚更ゐる　御幣まて連續いはゆ或ハ

そるにより離れさる樣り繋へし古なる時ハ

並へまとのるまゝ和詩に相見又結句詩に大る之

よくしんを附へしとなり

琴二曰

和詩ハ照之韻と申る姿なし和詩も詩の通り之

一東　二冬　三江

引て見れハ皆五十負なり

人工

和詩りハ今ハ雪ら毛部を作り入るへし但梅樓なく

ともさこへ梅花ゐ樓もうゐてゆへとも名人上手の所法

と存ゐ

年　梔菴

樓に鶴ハ繋つゝ日も　淀の車に年ハ世話しも

寄りよ雨れぬ梅ハ知られ　深くも生ちぬるの姿しも

卅　魯松菴

千里嘯く虎も出れ　又雪無僧の手をも憎まれ

只風流を蒙てあし身は　無出く筆の深名もたゞれ

西行法師讃　　[illegible]

阿漕くと立ち出し名の　こゝ立て衣流て墨とも

今は東妻の撓に打落く　暗立法に看經とこそ

年梢　　[illegible]人吾仲

餘の者羽の筆を見やまいは　[illegible]坂越へて年は以ぬるの

我は老曾の數となりて　向ふ鏡の山もうるさや

蕉の[illegible]いまし先はあとへ戻るの教なれは

姿は先にして情の[illegible]なるをも知るべし

[illegible]しまは[illegible]の名にしてさ[illegible]しまは

風雅の[illegible]なれは[illegible]

[illegible]

[illegible]の名にうれしむ

[illegible]は[illegible]の[illegible]れがら　再ふさひしに[illegible]

此林集　武藏野　　風話

むさし野のもてしなき　林は生川名もひ[illegible]し

新[illegible]に二千里[illegible]　月も[illegible]より

陽田川

あれはまつし秋なりけれ
むかし男世我綻し

都鳥の名を志賀さ
月りもとむ其三田川

・富士　許知

今宵霧てうと四方の山あれ
月ふ猿聖の雲は此とは須

富士此を都て見に背清
花り屋上此雲をさやきよ

・女陰　・歸菓

秋のましおれ法ぬくの世や
それもかうとは蒸もすまおも

堂菓は出とり神の雲けさ
秋のましおの法ぬくの世や

ふ易の志
志極此流

ふ易の行
露りて世
ふ易の菓
人もえぬ事

△不易流行の話

ふ易流行は我国の頼向まして勾結を
知て ふ易まも曲芸地の三脈切り地は志
芸は行曲は菓

不易　古池や蛙飛込む水の音　蕉翁

流行　景清もむ見の生まれ七兵衛　公

・不易

菓日記
不易にくをしおりの流行にまをとなつるなし
流行にとり知うけたるものは不易の生へ出る雲を志れ

我後新文法
不易流行とは頼向の
所方をいひ
志行菓とは勾結の
法をいへ里

猴つけさせて菓漬振出ふ　蓮汾

万能も生て一心此あれの果

梅咲く知とへり
流行の法眼の事

梅に流行の元合は流行
して一句の表裏実体作る
不志の作之

・流行

梅の名をあ斗石の進む山梅
ふ易とは主和さそ此ハりし本然の
情まて梅は明をむ頼向をいひ
志とはかさり此ふ事をさ言うし

感ぜる作をいへり

・流行

新場あられて鴨の脊縄

西国と知らて江戸の秋時雨

・五升隠徳　不易

川狩や備長の袖の大きさ　一青

むの数も日にし増て不日雨　渋古

留主のちか葉の戸へ又の鶏の家　里郭

・流行

已の名残伴義り咲の不日雨　渋古

敷き捨て伴ひと濤へ水鶏の家　里郭

川狩や廃りし番の和しき　一青

△　志行第の話

志　義深の角や而施の称ふの義

龍河曰志とは志実にして而色の糸筋を取られ

翁曰志のるの姿は平かなる言葉をふ用上下思ふる人に對する如く行義を守不仕立るなりこと

行

いさゝら陽雪るんに行ふ所まで

行とは其の法の世法を法にして事とは其情の

翁曰行は云葉にし平陽を云るとも如き志あるをもてる雪るんに情ふ所までとは云葉は平陽なれ

とも雪に切なる心の程を思ひ出し是は一句後斗是て今に對する事

ほとけ生るをいふ事也

・言　名つうぬちうて深ふ情分

・行　猿の手の及ぶぬ穴や杜宇

・草　蛙の声や弧帳の人の感陽宮

草

振壹の居あれば其比事縁

翁曰振壹とあれる云葉をいひ来縁と俗成てをいひ立れば一句の俗社祢忌るにあらず

此法後忌せるもあらず感忌せてさんさ御ふまるしく句を結ぶ之志行草三句の

まつれの事をんを付てんとし

御説曰曲芸地の三体は句作りにあつて疑句ハなし此れは巻によく地を知れば曲芸は自在

なるあれば曲芸は時業にして月次の如き極句ならば作りも如あを案ぶ之うらは

△曲芸地の作

蓮師の附合

桂の色を棄ふ事あり

地　出代の三日より家の名を付て　此句桂にうつらひて付ぬ之

地　出代りの御供へ本鍋を作られて　此句は桂のうつらひ御供と付て

本鍋は面上り供物の鍋　此られての云葉は棄ふと云字の小さく之

芸　出代りも古代の家まは伊達ゐて

桂小伊達は附合の然しまて　棄ふ事ての御務之

曲　出代りは百人一首をもて志門て居て

桂の桂のに高山の何らいは句編まて法ひけるの事云人をもてるは　論語の紫朱を云ある之

傳小牙三の桂附方なるも　芸は桂より風流曲は桂に芸の百人一首ゆへ

今は曲芸の字を他此付方葉門牙一の桂或也

曲節地の事

此節ハ字ハ盛リ縁すれハ

地

薮入の馳走り門の萩咲て

節

薮又入の手より漏て胡枝も咲て

曲

此寧ハ手より大名の芽を咲て

五十川の傳

一字振り地ハ曲り字し
此る地りりてる付ほと
頁縁の字より
一縁を数へてと
此章仙

曲　抹れ猶て青ありあは人揚（うや）の雀

節　さわ猶て何処よりて見ゆる揚の雀

地　抹れ猶てまんまたちぬの揚の雀

上　心なれ思何して然る萩紫の影

節　帰りかゝる萩紫や思ひも花もせん

地　萩らしや萩紫ましたれ濡る声

△五照の事

未了紙の傳注書首

篤凡の曰 相對とは人と我と相對なり
頃とは晴曇を合する事之
對 彼緒と靖と對して之句作に言ひ
本源
本旨 くるしき枝に絡まる之

挨拶に用る發句の體也 挨拶もまた一つの主客ある
主客の涼しさ取りすまして句を作る
ある御方に陪る折 月を詠みたる
當時の姿を学ふへし

相對
ますらをに取り 挨拶し
本源
梅の雪
松は花より朧にて三日月

保元一雨明てあふち雨くもれ 未だ涼しく漂ふて
垣根の梅の花を比べて此の夢のの偽哉
比たる也や

比
梅咲ぬなふ山里哉 思ふこそ
こころの花の 心鏡の沙
蒼やがて晴てあふち雨
垣根の梅の花ぞ咲く沙
市中の月も白に夜の月
あれしくし門こののちえ

漢句の對する心として 祝儀に婚の空菓を對して
法りて婚り引る菓の出しをとかく菓に在りくた
情に對しすへの紙に用るに入る之た

對
名の辞は新古とれ空と出た
竹のもや雪中もや竹の出
法り子は精に降り菓に在り
鏡れ古菓に出り出し清

昔常に有紙や空豆の麦畑の紙々情と入
小作なる端しこ立ち鶴のさひしさを哉まし
せて世るに数てれ香の鶴の豆なる沙
兄子八豆の一字を
入て流川と畑のあるをと見せるた
そをと本源の紙とりよ

本源
雪なる山本の住む多過ぎられ
引水さし梅のほる里
豆れ色に多く里麦の畑の
豆の水鶴のはしる流川

本旨
新な叙とる むとかま
暮の夜は月出る猫の天の原
おと揺る夕立の空

一 相對付 是八采の句より起る 五紙

二 歩添付 是句の言葉を續ける情を歩添て付る 今十二七八の歩

三 遠付 是も天と云ふ地形を遠く付ることを云

四 云付 是も細ふこと意味を能く語て云ふ事

宇陀法師

抱の松より取出したる法師

ぬるやうにこたへ玉へ

一句ごとに意味を深くする句を加へて

抱句 該字より前てふ字迄の一句の事 其一句とは其の日のにごれるを其の句を受て詩歌 雪月や詠れば清し 雪月花と連ねたる時は雪の句ふたつ月の句ひとつ花の句ひとつ都合四句なれども雪月花と連ねたる時は雪の句ふたつ月の句ひとつ花の句ひとつ都合三句なれども雪月花と連ねたる時は雪の句ふたつ月の句ひとつ花の句ひとつ都合三句なれども雪月花と連ねたる時は雪の句ふたつ月の句ひとつ花の句ひとつ都合三句なれども

其日の客を客とせぬ連句の法なり

よく此の下の句共にて昔の仇討の松

五

比留り　足を前後を遠ふ候付る事之比の字ふかなる

まねあらはとあり里

面銀の外

ひとうみ對付　是れ勾と銀とを合一勾の時に成るを云事ふ

多し

拾ひ付　味をうりちら里と志るのみまてしるあり里

勾の意を拾ふなりかしの意味之心付る似なり

大小の銀　大なる事りかしの意味あり里

雪乃ある山を見鉄り　柳うれ

右銀の仕候小は銀を案ぬるり山を見鉄の柳の意不ね

入江に雪を一本と見て入江の　競字に仕立る者平

勾小なるは柳を其季のあしらひ入江ふ相應なる

柳と案して乙鳥を得て

行りしるゝ乙鳥の鞍

と定めるり競を定めるといふ平勾と遠ふ　口傳

たのしきを
たよひ行くも果ちるむる
集ちされて梅若様に
咲きるもて花京まて汗
塚の花集
拾ひの所しなのうちも花の枝
言ちもそれうあの花を座

△当季に有の名の事

新葉　墨五し集
和のさきを志るれ名も
折うると濡りも鶯菜露深菜

夕河の
君代ち花菜の清賀月の空

古今抄

白露の玉の芙蓉をまに居へて　流の枝までおうるの葉へ

折ゆく秋菊の　紅葉
年丁坂
右露清振まく
月の往乃の折の
空をる往りて前の
例におく

折うると梅さ咲れ　清音

杉保の
志来れうる一木の花の咲く里
れうるぬるむ水気の居

信

折うゆうし
梅亦履
其ま六日し

△小て留りの押字の事

を　水さ犯るを人れなるひまく
年玉とおのゑうひ始まく

六、九

山家の林に郭公種々啼きて

八　うちてさへ女房の見んきりて

て　よるさへ郭公似せさるんりて

○何ともなき声の身も悲しくて

も　声かれも声すまる郭公鳴きて

拙き世を出八十ぬ今朝まで

ぬ　声声ましこの郭公くらぬまでまて

何也曰
郭公きて通ふ句なるに通ふあり故に郭公の発句に第三まで留を用ひす
挿句乙句外の発句六第三まで留を高なし決定するゝなまり通ふう第三まてに通ふとも
吟体のうへにて
郭公留める発句にても留りの多くハいる事あまて待ちて
用捨あるへし

ことに第三まてとれとも待らはとのや

古今教
空挽八八体の
挿物に添へれ
言も不思の
体ゐれハ郭公に
見れし

内始射古称集　五竹老師

△

空挽の秘句の傳

郭公の時なるを聞の声
紫意をまはれを蓮州ありて

発句子注
空挽八発句の見とぬいり
去り執向を立れ故氏
中位より執向をとるこ
索句にくして執向の取寄
俳名れと垣子紫意の
二字然るにて申す帰玄字句
もし鶏意と廿八垣に
姿と気にて字忠通
せし空挽の姿の
なきやうかるへく

乙子思ひの其始ふまて

撫る音のうちと葉り来ゐ

一里遠くを抽ちる降るこの

・空

△ 連語の前句に附句之傳

、内外都古語集　五册花詠

よしや世れ雲も　晴せ芳野山

さかり　夕暮を眺り　晴

此句は峯の花之盛り晴ちり夕暮を古へあなと上の七ふ
ちり夕暮をよそに眺め八晴と以たる様しく無して寄る
まても雲にて流るるも川流れあるも川晴るのを見思ふれもろ
なとは前ハ附句の案し方下の七文字をして案ん成るべき
よし

七、二

△千家茶事不白斎三の伝　川上宗雪古流集

別深安し月まも嫁のそら絶よ里
ん右窓も垂ぬ明くれ
危見ん名の付声ハ皆く危見ん眼のら

てこ留ても小留りてもとのく寺越のこゝ不かよ仏侍やうか
此ハ帝の千家茶事留称之しと此事まてさるゝ宮らし也
不白斎の命によりて以筆揚せられしと之

流し舟にて
山の井りもうしれ霞波あつられ

蓮師

さる山の井とハ山の井集埋木集などに古称の題名あり
下の文字流之てと互しに異且之称の称ある此ハ
能く流れのうと直しけり引一茎の挿so花とうるく

月をみ床　　前三ハ網等にて流しおよびよ字は此ハ帯の字も論じ

引すおんり芦の白梅もあし
宗家と思へハ宅の庭こうらん
緑翁持せ花茶のをめうふとた
不字の蔭る初る　桂この枝
嘆のうふ響も諸も杦むしも

△五丹老師むの新式傳　内婦朝古路集之五

其中りまけてゆとなし山杜丹

山杜丹とは　あるへ　まうしの

阿闍梨の徳り　神も生ぶ事

けり御句略

何よりまも　ん　れむの　志のしてて

揚のむ

家は　国ゝ　姿れむをなしこそ

此物のむ張りしに一格之初折のむ心此むしさまは此處に姿
の美を案して又銀の乃価の姿うと以えるのをおし事て
姿の花をなのしこふと以える事を接樣も有之彼有
花のむまを仰ける格之

● 匂ひのむの傳

尾元師三十三回忌手向の頭仙行一巻出来り左五年老師の
扱きにして名称のむり至る庭譚は句編匂ひのむ形なしと
各案しけるに尾師の曰此むの乃例の如く尾の教の仙階の
尾といえる教ひ蕉忌墨直しなとしは遠ふべしとまを

いうにと以ずり仙祖と代々の師家とは題一なるべうほを
心得まで案をへしとえ

以よし以てきよりかな結

姿し其代々の教へのむ形まや

といえるむの乃に格りし体に匂ひのむに心得有へなるべ

或時黒理無夏窟に於ひて朝むなとまに三吟の仙階
なれハ短冊行は例に初折のむの乃主又名称のむり

へしと申合ぬ

△ 籠り月を附る儀

内姫様古紙　五竹老師

豆の露　夜の籠を二見とも

此れ又月り　桜の姿也

是ハ前頭の文華宮女の折うち老師の扱きなり

籠夜　夜ゆゑ月ニ上ニ上ハ何れハ月の注吳名之星月花の儀之

徐風河曰

籠花の夜ゆゑハ月の注ニ吳名の月をすべしとて

七、八

△俳諧題曲流の詩

一方に遍席題曲流といふ事あり

我（遍）詩は　朝の（席）なりしを　麻（題）を出む

世を（曲）空洛山と　人は（流）いふなり

俳諧は短きものゆへに題曲流の字を配当せり

うくひ（題）あや　餅（曲）り糞出る　椽（流）の先　翁

是題曲流りうるひなる姿あり中の七文字の曲

廣大無邊なり能く再作出へし

きつゝや餅の当れ　人を世界　木導

此し餅のよにいさまて年とらん　許六

是題曲流の詩りなるといふへし

右は蕉門墓の葉といふ集りしなり

△一画漢字ノ方、五体ヲ兼ル

一画ハ諸画ノ本ニシテ小画ノ如ク細リ太ルヲ嫌ヒ
横画ハ左ヨリ右ヘ引テ作ルアリ右ヨリ左ヘ引テ作ルアリ
又ハ中ヨリ左右ヘ引テ作ルアリ
竪画ハ上ヨリ下ヘ引テ作ルアリ下ヨリ上ヘ引テ作ルアリ
又ハ中ヨリ上下ヘ引テ作ルアリ
左ノ払ハ上ヨリ下ヘ引テ作ルアリ
右ノ払ハ上ヨリ下ヘ引テ作ルアリ
点ハ上ヨリ下ヘ打テ作ルアリ下ヨリ上ヘ打テ作ルアリ
又ハ中ヨリ左右ヘ打テ作ルアリ
横画ノ頭ニ点ヲ加ヘテ作ルアリ
竪画ノ頭ニ点ヲ加ヘテ作ルアリ
横画ノ末ニ点ヲ加ヘテ作ルアリ
竪画ノ末ニ点ヲ加ヘテ作ルアリ
横画ノ中ニ点ヲ加ヘテ作ルアリ
竪画ノ中ニ点ヲ加ヘテ作ルアリ
横画ノ頭ニ竪画ヲ加ヘテ作ルアリ
竪画ノ頭ニ横画ヲ加ヘテ作ルアリ
横画ノ末ニ竪画ヲ加ヘテ作ルアリ
竪画ノ末ニ横画ヲ加ヘテ作ルアリ
横画ノ中ニ竪画ヲ加ヘテ作ルアリ
竪画ノ中ニ横画ヲ加ヘテ作ルアリ
横画ノ頭ニ横画ヲ加ヘテ作ルアリ
竪画ノ頭ニ竪画ヲ加ヘテ作ルアリ
横画ノ末ニ横画ヲ加ヘテ作ルアリ
竪画ノ末ニ竪画ヲ加ヘテ作ルアリ
横画ノ中ニ横画ヲ加ヘテ作ルアリ
竪画ノ中ニ竪画ヲ加ヘテ作ルアリ
横画ノ頭ニ横画ヲ加ヘテ作ルアリ
竪画ノ頭ニ竪画ヲ加ヘテ作ルアリ
横画ノ末ニ横画ヲ加ヘテ作ルアリ
竪画ノ末ニ竪画ヲ加ヘテ作ルアリ
横画ノ中ニ横画ヲ加ヘテ作ルアリ
竪画ノ中ニ竪画ヲ加ヘテ作ルアリ

神草呼草の讃　其の所より咲おふし苔のむ

月に紫山子の讃　月新もきぬとなて有明れ

二人半伏画々賛

新迦ハ宮を解ふ者子ハ恵を語る孔子ハ仕て第ふ

此賛を感じて其蓋義卿の門人となれり

神の縁を證に繋ふ　法家の答日ハ以て永しむの留王　[illegible]

[illegible]

花生の名や　[illegible]　園城寺

白氣の枇杷に　[illegible]

[illegible]

浮に鶯の居る画　鴫の留王粉れて洗し秋の暮

秋の鶯に兎の形を見ぬ程に出て諸処をうろの事に

東黄仁画賛　以来　[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

三幅對画賛　左　[illegible]　中　右　[illegible]

[illegible]

夕虹や日立の月見より落花れ　[illegible]

秋澄や雲まも実まもこそ　[illegible]

抜粋集

縁ハしに陽ハ秋の暮れつゝ
無度いたじ笑ふ月とも

今ハ昔

山里や秋ハ手を組む秋の暮
秋の志けきりしをも帯雨　松坂
寄鹿の月毛の鞆も離見せて　茅江
三ツ雨拾遺　猿引の右を清や秋のくれ　山林
芋の月見も菊の月見も　菫二
味流す百葉に笑　案法れて　巴静

△紅葉の数ハ小鯛の傳

紅葉の数ハ鯛を月を見る時ハ月を照らさるやう
小鯛あるべしとも

徐風雨白

△九月長者の傳　附三月長

古梁師曰九月長の名稱ハ限り月なりかゝる時は 第三ハ
年經し出志なり九月長
目ことぬ名を雪を作り名の月にして四月長雪五月
古今惣し名ハ更科の秋
雖りなるに傳として志のれハ四月目へ出ほして名の月も
此分三月三月なりの雪名を雪ハなり
稱るへきこのと
七月目
明らかなり然る雪宮の是此意
評ハ白是一法なるへし
其の種種を付ハ師曰九月長ハ限り名ハ名ハをゆるすゆへいはしも宜しく
遷出師曰九月長の名稱ハ此時第三ハ月をかゝり名の月ハ
又ハ月の名ハ限りなり
して付るゝ是傳也と
若月ようつらすしてハ無論ハ更科明ハ彼ハの月ハ名ハ雪ハ雪志なるへし

八、四

元有ことも月なしのす秋ハせぬるへとこゝかゝり
志ましす秋も来てあらぬるも無し其所句御法
の内ニ古の面顔の内ニ
鶯やさふ久かゝれ面のけ
橋吹きれ秋風もかれ
松杉ハ残り柳ハさゝ御以て
行て宮もや山里のあり
右ハ四月なしのす秋之日しく雪ゆ

山ぬしまもやことしあらまし
正月れ一日の夜ニとひと見て
からまゝ似つるなりしれ来
里をとく夫婦屋まりし夕霞
子我ハいゝ川より思ひへれ雲
右ハ夏なしのす春之守武手ゆまかやうにかれハ来て
せぬるとも云へ居志し一生の家道のゆるしあらハ招
別傳愛なきものいふして咎められる時ハ云ひ

されども巻のもやうまゝて月の性に差合ありて
むの性まで月と云ふことを一つに結ぶるあれば其
時のもやうまで月を持へ送りて素秋を為する
も又変化の中なれば素秋の時は神秋晩秋より
定りたる季を用ひ中秋の内絶ぬ八月の季を用ゆ
へし月は中秋の貴賤なれば法を忘れぬといふ
心の情也

三物拾遺　素秋　三ツあ

木陰くらの中まで山や鹿の群　の蝶

故素秋を地に為て浮　東西河
降とけぬ面を芳水の霧見て　徐才

鏡　鏡主七四忌　喪ニ鏡掛

面影の掛ほうまゆ七めくり
それ春の夜も袖ぬきしが
知る同士むかふ所の此とらうに
背うら背へく掛けし橋
頭も宛ふ宛中まで岩のさる自りて
筋ふの果も其の此　法

左思　　此巻 鏡斎行ナリ

△發勺八躰ノ仕立 门七病

諷誦 談笑 曲節 自在 姿情 躰用 悪実

差別

・七病

时莊言 理屈 枚題 枚意 吳躰 又メリ

往遇

文章に 脩辞 達意 主客 緩急 抑揚

文法

鎖詞 ヨクイクツモイヒ重テ連續スル詞之

互照 青ニ柳 蛍ニ星

字門對 山川 花ト雪

長短ニ叶 詞ツキノ永イト短イトナリ

四六の文法 四字ト六字ト對スルヿ

△前圭ノ傳

○五七五。四六。あと云へし 韻字も言目くと云へしと

自然文庫に何里

隔句 句ヲヘタテヽ意ノツイスル

雙関 彼ト是ト取ムスンテ一ツノ道理ナリ

潜綜 マハツテ意ノツイスル

倒裝 上ニソレトイハスシテ下ニ原理ヲアラハス

蟋蟀 蟋蟀牆に今と 蟋蟀を七八月より頃と云ふるやうなるもの

△比諭附句の傳

おのゝるむに二度目の風情有 月出雲岸

若やく浮雲に浮ひ指され

如雲曰比諭附は陳風浮雲の浮より始りしよし 解

比諭は 韻か先まして 雲へるものゝ何とも 新は

韻まてつゝらぬゆへの事なり 夫ゆへ和讃なれも

韻の先へとて

附 兵上寶珠の名号ト云へる和讃一首のミ

韻か詩へ

陰遠のこゝろひの事も書これて

十日の菊れ情しおもふ

比附一句のミ韻か詩へとて

韻 前浮トチラニテモヨロシ

右詩文章 比例アリ

△無常の前句に附句の傳

月色文庫

葬礼の続く黒報の河ゝ絶て
そ前ゝ此思ふ胃見せふそ

仝

死ふそと思ひ定めし横雲の月
隣の男小便ゝ出れ

△續月の傳

暁秋ゝ月

秋は先きつて拵ひん演の唐
黒日は小春そいざこ来さん

月を見し時の時橋を渡りて
松風は春の夜洩し暮れ秋
月も河ゝバと思ふ横雲
雪も昨日を山れ冬隣

ちる雲ゝ星は
志らえて地ゝ分
葉山家の弓の
新も活撰

乗く時も夕日の色や秋の風
弓張獅の探り氣　徐風居

長月の夜と友宮ゝん夜の寂
白鶴のたとへまでも清冥
ちらぬ桂の大前の清冥
云の葉葉をむふ事氣

仝

不得氣の桂も清冥
不得氣ゝ云竹もむ
のめる変化も氣の秋

鶴雪の落らく
方や日の色じ
黒も桂の
名をかさすむ　日

二種の月も海て洲しき

他の季の前後　季を出して月を頃の句まで出る法也

小黒の裏をうへ見あらし

地ハうれて月廣くと汚濁り

涼しさも寒い黄昏と前ふかり

月新り汗流れ行水

月の雲　秋季也

笠り照る新も志らなて月の雲

稲を思ひいらぬ風吉殺

月の雲ハ花の縁

弥貴の宮も頃身ハ輕ふ有紫

入れ落て山の手り入れ

弱柔のうとんもむふ延し金

半造作り床裡の　春雪

け弥ゆるの句名ヲの雪目えうどんハ月の雲なれど宮ハ出る

有むを出して け頃裏移りふ

水香も花とこり　ゆすへて　纔　月

月花の作者　花主し三社の家道の切者の人か世人の所をこ

月の部注　昏るか紙等三上の句に月の時は三次月の注
雜まてよし

長月の新秋月の新　新と所れは月りなる

流舟
源貞は八月の式なれとも名称の裏の所に法ハりて
せまし起とて家種の比　勅許ありて四巻七月

の式とはなりぬ此例なるなりふて今式の歌仙り
小は神祇の七月まて月をして二巻二月まも
此すへおよし貞享式の一条之

常の志を注解之曰
月を引上るは四巻に月の種類を以て月を動
する事を其の指合に法らはなりて法て月の
かしき時是五三月引上ても法は又定注あるように
月の類しくは前を云かして法は又月とむと注を
入替も出へし凡注の月は指合を凌て付るし手抽之
定注なるは現月なるでもよく動せは現月句編之

又他季の出来もあるによりて前に在所れハ家ハ名と
無理すへからハ高名和ホも前句の自然に任て扱ふ様り
自然を得へし
或説に曰他季の月をするなれ前句に唯出しの季
節出しと存月を可附とそ去なるを折とれ
尤も月に至附あすら何も有
不思鶯巣為撰
むの藁集　遅来師兵見
注まあらはしに二種れ前
定てるし新もするとに月行て
造作もなしに沙る蕉蒻

大垣まで
面白ふ絵や嬉れむけうり　不歩付
秋の日さらの笠り和らか
東公の名もいさ雪れ子を持て
面白居　月後集
旅し鳥喪りまるのも君か代り
何れへ出まふと云ふ程の月
春の小月並の月行る可のんは

秋月や丁ハ何呂彼もまゝ志られ
紫ゝぬ星も出て 拓ふ宮
けたり秋す夏ハ橋ゝら雪をれて
是ハ月の宮にあれハ家仙表裏橋りの月の宮をうくして
三日の新をすゝ又同し意ハ
出る日より喰て入日ハ前れ
彼岸の角をうくす孫帽子
正月を元のまゝるまて終ひ意
二ノ折の橋に有 日月の注異名也

又

風俗り住する萩の葉月也 吾仲
秋月ハ月の一宮にあれハ
是も裏橋りの月を十六宮の所にあるを
夏の日
西南に棲れ花の清かむ時
一出に是ハ七日の月なるべし 桂の葉ハ月の
事にして花ハ喩たて十五日ハ志賀まて
七夕の比ハいかまも答とうれいふへられ
何ぬ云三日のこゝろも答といふて如何そのお源を

紀さはしての杜撰なり七日の月を押して月の
蒼と利口に作る説は七日の月を一日後の
月を申し入十五日を月華河といふより蒼と
白作せしものゝ

江東坊
秋とゝもに詩もふけしそ既陀もたさ
固むとし兎の元も　秋月　江東
秋月やそれは河内りし事をたゞ
霧の陣の雁にて　の歌　全

長月の名も折からや山の固さ
訪ひ寄る秋は生れもしよ歌　平原

枝折集
秋月のをしてをれしいつれても
明け安き夜れ歌は志まれ
全
秋月や姫さまりもたゞ詩し友
家のゆうりも斤彼まぬ歌
全
星はきのふそふいと既陀の君にし
先川祝くとの　さつ川きり月

三の方　家意抄抄

意のしは好な松を家　訴

まてそこなのは竹なの方

可橋の秋桂の実のるはしてて

家の風ふく風の　[illegible]

世の玉集　刺髻の時

長月に長の重ことを刺る日の時　年粒

[illegible]の新の今こそは秋　風雅

名古屋集

いつく人の世にあれはこれを折し寄

松もと宵の自を待ふり

めくるまた　春の日宮柱

眠りて見ても玉兎の眠るは

所柱しの待しく長月

[illegible]

弓張の志かむ木樵ふかけ疎く

出代る詩を秋月ふ待ち

桜の花選

忍び立宮や千里も夜　清　雨[illegible]

[illegible]ハ霞分て志ゆふ

火の加減焙炉の世話れ明るに

九尺二枝の襖抑りしよ

ウ出るやいな乾坤[illegible]月さしそ

自無月の前句に月の附句。

家の高一歩　和月のうちは故の声もなし

温泉の山は桂男も涼しけれ

古田出雲松　長月の花れ長のしとなり
照る新しき　桂の花れ　志　翁より

一　新仙門に七月月の宮社とまるは晦童庵の作例之古調にハ始る雪月月の宮社あるとも庵の様ハ如此之短歌門ハ雪節一万まで拵るも庵のよりと是ハ古今抄之様無京道あらハ七夕月とも短歌ニハ雪一万まで拵るとも志かりとの風言によりて作例を宮の結ふと之

七夕右　亀の濃も小さうつこさ
花ちれ　垣も　桂　男

新日右　月　立の日と云
晦日右　月　篭の日と云

新日右　十日まで　新日の比と云
十一日右　廿日まで　重の比と云
廿一日右　晦日まで　晦日の比と云

百丁

花の傳　前に花式二段有　月の文座敷書く
見るべし

花に桜の紅　花の座月

立途なまおしやもれかくれ里

訓脱て直り鶯の笠

京やうの宮つら機を経をして

発句にも句り紅に桜有は附たる月自の注月おりにして出る月に

一句立多数しもの注に月をとして秋なる連て添せりも経

ありし之

想板も働く自れ料理なる

・花火　長家り二表十六号目の頃れ附ふ

櫓のむ火り　雪結　弱り結

名を　雪消くて為乳の山も　むなり

花火は杖の西を右名のむまへ有名のむ有しと致を仙難し

それ其長頭り以上の壹まバ二をまてに沮しき右雖とまの西を

をつしられしと其亭中されと其後有名のむまし

と梁脇中されし

・伏花　表に桜もむも出る時是むの注にて多有り隠し

花と云花の注まて其名を入花の名所を結ふ

是を伏むと云

・有名の花の名ふにむの注

雑子明て思根は赤に花明ぬ

は名ふ山中の良無之本此か法じとしゆれと花とあれハむの注まハ

子細なく桜の一字を用也

（餘喰ハ如旋人ハ有しの花
下ニて我のこのたりをちかへ
たもれ唄てや為茂三百里
来もまゝるさんらちから花のさる
右の俗合まて一理万通すべしこゝしく茂の名達之

夏季の花　短冊有り
物場の使鬼王も来る

花唄し侍も有れ葉れ蔵り
古鞍縁合ふ面色の礼
名ありさふ清の和子をかりて抱
廓ありの今り買喰
鳥啼て来めく浴縁の頃すのら
代ようこれし年もきたる紀
花前り物場の名出ると里よりて夏花まして来るを来へ
出し一生海は梁河の捌之

月むの結句

名和れ今ハ宮治のを遁

鐘月こゝ雨し明るてむくりり

かゝ里人伯母の口を憎まれ

月むといふも世り有時のなり

志めしの足らて知られ折水

折るゝのか月にもしむよし

取なし花

貞享武百姓のむ花嫁む親心のむ詞のむなりを難勇の諸名にして

こゝ木こゝ草の名をさゝぬれ来に何らはといふるなし植物に何らは

といふるなし。むやの。むにしく。菓のむ書の類ハ生むる何らは

名なし。詮する不月もむも書れ詞のあや今は姿の論と知るべし

桜の發句に花の注

發句　木のえれ汁も鍋も桜ゆれ

む注　千頃のむ花れ蹙の一身田

角士の芳理を桜

發句　角士の芳理ハ思ふに杜鵑ハ

むさし　我国の　さと山桜　唄ふ所案

古今の句は宗祇の時の俗僧しむの注に東国の桜と對

花を含む句

鶯　暮りとも桜り行進の夢名残

花は　入れも中の山尾之　此海りむ

此鶯の山のかくし題まで黒る詞むまで桜に到し鶯れは

鶯の山に花は含たるんとこそ桜の海りむを花の注り詞なり

来秋の花ノ花別

ほる　花りよる故蝶や夏の魂なふ

白む　菜よる故蝶を花にたふの客

こほれ花

菜のもとに六ヶ歳時にこほれ月の例の如く花をこほれるも有

通しこほれ月の所まで知るべし

峯句　菜の字を書るも有べし好るに何ら

花前を通　夜分風雨む前夫を通せべし

花の春り菜の庄

爲る紙等三点にむの事有時ハ神社のむ名さしまて作し
桜櫻桃山吹柳蔵こまか

帰花

爲る紙に陽むこ志むこ何れハ神社名さしむたるへし俗何の陽むと櫻まつらぬ名さしの陽むなれハ事細なく名さしむ此例にまへしとまつの話也

櫻ゝ　つらさる事

桜鈿　けくら矣　桜子　桜うらひ　さくら貝

菜まつらさる事　　をなしをいふ

むもしろ　むも毛毬　むやの　菜の種　菜のむ香　はなし

此式目の事に傳あるは月む文庫にもそりて
家にもらし傳る

其後集　松浦が
かしつまて　元と菜の母を月まむ
里は　鯱に　桃の　祝い　日

秘笈抄
菜の庄

花は是を重する所の所を脇に辞後する所を十ち来
むの庄に極つる　所のとしつるのよし

秋季りむ火う出れハむの在にむハ世ハ桜ともすると

餘む

白むのむ

爲るの理をむり白をハ白をハて言葉にあらをハり

あらハんとふるを白をハ白をハ主日の接桜のみハ生物なれハ

生物ハ其日その爲の白ハ之

大鏡ニ曰

桜の影まて花ハすれともむの影まて桜ハ

せぬ古今の法令となす案

新ニ或ニ曰

花ハ四季まして百貫に四本月ハ月にあつて八ツ有

へ部を七ツ出して月を一ツ隠すハ滞れハ見るといふ口傳之

浪舟ニ曰

月むの白ハ世人老人切者へゆきる有る月むの白

ハ行ハりて定住と成るり二むを三月になりとも

四五七月になりとも好きへ河へハ在に定りハなし

といふ由源河れハ之とそ

こを語集

霞ニ河

桜ハまく喰て志まへとむハまる

桜の魚の湖ニ流し

口

むの姫のこと語も薫石保命河

四方の桜ハまる喰るとも

問云　花小桜ハつけ　桜に花ハ一向付ハ花を置る花付るなり
あるまや

圭子　一本さくらハ春れ置かる
志賀の松えるしむの波越て
花の波とハおもふれと波のむるとりなして正むの心をぬおてくるし
うらぬるの
花鳥川波の花しそ喚まれり
雪圓山さくらちるらし
是も波の花と正むなりさるをいふて付るよう
鯛のさくらハ濱より喚ま積む
是しハ宮りの付ること又
もうる歳笠の顔ぬむむの波
せひをうそいしうそ桜の那

此句ハ本の桜之されとも くるしからぬよし 仙せあるあらぬ
桜も付桜ありと昭傳あり是本の事の
葬のむの菜むハ鶴ひらけ
隠居のら先や、宮ハ初る
盛り時絵て見る春の嵐山
右ハ井越り正当ある時のむの附句なりと是
問云花り桜付る事むつかしきや若むつかしまといくそ
知りて秘説之又世上にまゝ有ハ怪ま習之花小桜付るハ多く
仙せあの桜付也 粗異の秘事有る之家養独唯を言に
おら
とりんといひし花の春風
奥ハまゝ遥ホも何れや　山　桜

是ハ何を和小姫ハ如此付られたり石審なるゆへ此付やうの
秘事 殊に大事之又探と云句に探を付るゝも古出にて
見たる事有 兎角源くの事とも西国を撰ひて書へ
事之

秋楠り花の事

秋楠りの花は冬季を今に付故に其の花にて御座に
其を結び繋る所り新句を付て連すまて来たをするも有まへは
かいらさの 鍾は花より見るまして
大名とゆふ其のハ 何やら
右西風五花の秘史ハ猶事の秘事の極秘まして神人の人を知るなし
名人たりとも故に用ゆるなかれ
庭元国の捌に二ノ蓋花の注を引上名所のむの注にむせぬ 捌に方向り

古今採らしに捌に此に紀して後の繋ともせん
花はまた何にも一重 嘆かたり
かゝる籠の自由も其の仰せ
移紀り 注まけ 其ひ 日の眠さ
山の小僧の里たまりまし
嬢蛍子 姉は 紫火の 行こり 立
澤り 込む 雪り 猫の 鼻 見る
笑 極に 松も 俗る 無 新
朝の 接 持り 送り 先ハ 有へさ
立 詩り 居詩も 自に あるさ 好き
矢立 もしく 筆に 神 丁
黒紅葉なりとも 立ハ 笠 至 も
妹 そう 以り 酒の 来る 事
鐘の 尾に 結る
此矢立の一ノの名に花の葉を附 花のうちハ 新しきされとも花の注

をしより雲の一字を見添しに出して名所の花の名を
出なし

・月の名所小花の傳

夏科や異りといふ花むの事

右月の名所にむを結ぶ大事は雲まで月を蓋る体まして其所中の
行帳傳も委しく言語を弁へ月り添らぬやうに至へしとなりわ
雲一畳に仕立る時は月の結るまでもひの月 萩の絵 嫁 絵 植 景 木の
其のを繕る之 浦の月はくるしからは雲は中の雲のを用捨なむる也

一ニ朱河桜 五月雪集 手拙 竹ニ云 植景見落して雪掃りにする時は御替り蔵入武は
日みしの取出し一度の月の様 繁りホの日立ぬものまで移すべし

△ 雪掃の傳 月むの序

木屋をうわ中て図を水
あて雪をやらく付あ其のむ付ひ時は前雅びのむまて
あてめておしても其の海嫌ん
付小其を結ひ繕る事ひわみ雅の句を付て連るまで 意其
彼此屋の入の能んでもしん
を出る事も所り先ハ
咲神るむ小柳の海をとり
かつらきの 鍾ねむより見るまで
大名といふ其れ何やら
喰つ以て通る所ら其れ 徐澤
法師まれ 神の事も得る筈

月雪を骨蒸市のさ[illegible]神を
ぬれ手に粟れそ何と呼
接する紀会の扇 [illegible]
二日 [illegible] 逐[illegible]も一つ那
[illegible]れて [illegible]をかくりのむくりあ
[illegible]浮世にちつかに小浴[illegible]

以下は新集 机高様
手蔵の葛のきあるとりゆく
二度の夫持て室[illegible]まと秋
厚の往来も[illegible]のそら
斜のむあちこちに 南 田

△月雪むの傳 [illegible] 月む文庫
足るや舌や月雪むり宮[illegible]
唯世れ来に紀は明 [illegible]
仕合をと獲も届は新しく
右の七日目度雪むの社有名まで極なあ

△文藻の裏書
こゝかふかこしほの花も浦の来

二尺とも松の朝日より梅の月

硯の蓋くらき

名よりせて海松に蛤の潘涼し

内へ入る
御見通し

雅句内家変化の傳

雅て飛ぬく鳥のちらく

鶯の前も原より弱るて見付て

無言の猪れさめる海鳥ふ

家へ出しける
御見通し

此頃内へ入
よし

家へ出しける
御

紙をうらぬ湯より此椽

芹拔菜玉味噌汁に梳なれし

山まる山れ先り又風雨

落くらい月。夜河なとる猪の勢直

蕎のかつらのまとふかり橋

鍋を重てハ歯打と医者の業も以や

湯りせふ形と罰ひ玉を擦

味ひも知らぬ連頭に梳をとし

山田の苗へ水の雁かぬ

摺臼もえの所へ所付なく

追従吏て不仰法所る

せくまたりほどけ兼たる笠の殺

はらくの語は都る像照れ

日は居坐る年の骨折り

曲突焚て鶴集を起せ老れ役

永へ出るある 編

四入れ為る 御入るべし

△懐紙の式

横懐紙用る事連歌を不定法之然きとも纔誰其名

稱まて長々まて七十字に配りもよろしからは是合ヲ

探すもまとひ河の故に蕉へまは多く豎懐紙我

用也へし俳式の今まは古法の横懐紙用

也是し

・横懐紙認根

十九字法

折まげ

七七の字余

中七の字余

中七の字余

中七の字余

十二ヶ條ニ曰

蓑五の條件ハ一ヶ條ニ蓑の字有へからず　元祿拾貳ニ有

本納の為ニ五者お通の通儀之されとも お通せ候ハ
とも神通ハ可ふ及きに出来るへし お通ハ
よふまし候ハ其ハ相同じ事ハ臨事ニ有へし

蓑五冥ニの事冥へきニ事ハ此ハ家道へ見せて
目出ニ候ハ其ハ其のなり

先蓑の為ニ真の御の字名の所ニ上ケて出之 猶亭主
弟三家道之兄蓑五の法之組し親愛一家を一所ニ

代りして入るゝ事も有蓑五の為ニ縦ならハ亭主ニ候へ
蓑の為いたして事ハ蓑五の為ハ前の為ニ金之蓑の為を出て
懐紙ハ添文ニ蓋の上ニ金之一所出来るらハ其一所
立懐紙ニ書金之懐紙折根前ニ同し懐紙を折
て金さ留ハ左ニて一所ととめ為の手ニて包らき
槐筆蓑の為ニ請て又書て金之槐筆ハ神通の
名代の通ハ槐筆よりこれ事ハ結縁之
蓑五縦の為ハ其事ニ心をもて発の事へし

蒙恵舟の武兵衛の事し

銀五匁お通是迄とあるまも及ばれ

第三を季、霞、霧、雪、橋妻

氷、露ホ河るへかられ

一折ニ内蒙恵遷枕絡一注まも用捨ひ入し

蒙恵の舟ハ文蓋ニ懐紙を上ニ一帳よこ絡る時夢ニ主

よわ扇の料紙のこれ沸ニ注ひ引出ハ有へし 執筆ハ

文蓋の右へ注をもつて一袋して更納す

おりのまさみ

蒙恵の第三ハ必て留ニ出るへきまて留る事

を嫌ふ

日

蒙恵の銀ハむつかしきあへこれ有る不老の事河ニも銀まて

目あなたなすへし又銀句の文字数合ぬ事も有へし季の

あまも有へしいつまも銀の仕やうに有るへし

八條目

本納の句お續お通の二義河ハ お續とハ五ヶ字

七ヶ字五ヶ字ニ分銀の五紫まて注とり合せ出こしも

離さる我いふ 淡句

東西も有名の国し給や神の給
西も降 社や神 又西も振神の給と和續する之
一 五音相通といふ事も上すても下すても一不可れ八
よしを和の句にお通せ給ともくるしからん
・御句
何の木れもとも志らぬ事ぬ
・本細今按ニ曰
本細の光ハ折毎まもの有ハ神徳の句ふの如ふ事
の句事

大鏡
・續猿簑 ・千句式
独ゆ来て夏れ当ひ行き橋の月
端蝶 落てきゆ名り燈
秋荻の御前にをよ 坊主庇
風呂の加減の志つの之ゆれ
愚考 結ふ曰 本式千句第二巻目ふ論連附一ケ不必の者
是則論連附の結ましてて大切の事之夫をかわて
附合せる之 長句と長句を附 短句と短句を附る之
夏ゆれ御前行燈ハ風呂すべて傳授口変なく
して解さむ事 潜之の御法之

千句会或掟

一 悪性不可掟の猿席事

一 一座之捌不論是非下経家道於理論有之志
不可満性以後於家道宿所可義論事

一 為年細之書を折毎毎義可為神祇之可不可出
不浄之可事

一 執筆略声不相源之内附可出し申可為事
附 回答之可依可為事

一 縁中のし底中悪性可依次之可事

右之内於不同心之者ハ悪性可為無用者為法式
以為制相定之年
年号 月日

手批断云 ・蒙恵の式
蒙恵の句に紙を弱帯の紙の如くすべからず是を以て蒙恵なる
名称のといへども其れにかゝるべからず只今甲書を結びんに有難に
中を述る事 当へとは今式ハ実を稽を悪用せし略式
なりを稽を悪用すべきなり

連歌秘書 蒙恵ばかりに心得のみ

一 大事之先を句に学なるとても学所にといへべからず其蒙恵を

ゆるる時雨を時の雫に用ひ銀第三の句をすへしトの句をうり蓑を
ゑらはれ千のに飛りすへし必ほる句に滿るゆゑ有れ是に一大事の傳有り
海を生まれて天神の御氣をうけ三十供物并行明をもちゐへ一室
清淨に行ふへし此百員にハ樣句ハ勿論蓑の字あすへ、のうれ
天神の鳴なと何にても中庭のうれ又神を祈るなもの詞にハ吉凶ヲ
必ず休すへし是行要之
情愛半ゆり者の如く但薦墨かすり墨の筆を嫌ふ之

蓑相の吟の事

たとへハ何くとなる句の出るを見る是蓑を之此時者の句出を見て名前ハ
御ノ字に認銀を手前かすると言ふ雫につまて此告とゆるあしらふ
発句雫なるにとにハ南雫を銀に結ひ銀第三に結ふへし

蓑を之の御詠

秋の雨りかつ雨袋や秋の風　御
河田の鍬の香りかふ山鍬　希同
鍬かな月見に鳴も立かゆく　蓮二
濱右夕日の出永入舟　○

又第三四句目

名月の弛を見り鳴も蓑詩く
雲をきこそくるむり雨此詠

此蓑の一吟別るなり折中ゆる銀り用とふ用の論有用を知られて
句銀を好きゆへハ中すへ如方に落中ゆ此蓑の銀第三に鍬の一字ハ
句銀へ此用とゆハ有るゆ袋の一字のこ付ふ有れハ稲と云ハ此て

縁といへる事云々抱かをのうまんとて鳴の句作ハ主用之四句同ハ
事横共にハ今宿の句なれハ縁なきと出舟入舟の縁ハしよ
用と雲掃かる池上の用と是にも句作ハ同しかなる
論略

霊月日

蓮二

帝周横

△ 婚禮 祝儀ホの式

婚礼の祝詞なとハ好ても学余り出へし

縁ホ不ハて柳ても水祝添ん

けるゆうりある方への祝詞なるんとも祝諫の分ハ有るし

祝野 韵字 祝の句ホ松ハ千葉杯詰るへからハ
小松の永ホ心繕るへし

まゝ繁せる美蓉也。花の産祝ひ

一菊の葉集ニ曰

産祝寄まハ 水煙流半月等一生まも忘へし

婚禮ニハ 離切去へられ 鈴虫 蝉 皇 又

閏 去りても 去へられ

八條目
祝云 お通しお目とられ五ヶ所波つ紀唇舌

牙歯喉の五音お通しを離るをいふ也仍

白筆や雪ふむすふの和字第

ヤヨノ二しお通しを諸種意深むすひの祝意之

五言お通ふ イ井ヒヲオホ

エヱヘ 是ホ豫まぬやうに考へし

一 祝言の時ハ発句綴り言の仕様 松花 松枝 松千代

と讃りを定めて句作へられ草木其他ふくへゆるや

まて祝言の時 恵み小松をとりそもろ〃将継之

花を植るまし之

・祝吟 韻字

家督 婚礼 出産 其外人の祝儀を述るに切字を以て切と

いふを忌むなるゆへに韻字を韻ぶくるなり

ましぬ夫婦や花の 出生祝ひ

此の切字アロサメの様韻をて結べり 此処抔の切へお慮りて

切ハせず中年ハ切へられ終に韻字を以て止むへく

△追善の法

追善の勾ふ字余りを嫌ふと云ても今は多く何りを忘れるは
苦しからぬや十二ヶ条ても視疎を分かると思ひまで方通
出へし　鬼の字地獄の訓法努しいるへからぬ

追善は五十日比と之一周忌のうち情胴と出へし

追悼の命ずるは

袁ノ内　あまり字　猶　重　又　ホ　省へからぬ

蔵　後　迷　氷　嫌へし　殺生一種すも省へからぬ

[illegible]

[illegible]

△許情三ヶの傳　正風に勺の情をゆるは口傳

五年の口授　正門の生へて姿なのら情をゆるす事三ヶあれ　立　退

善　哀傷　餘分留別是我三条の傳と云之

立　退善　此三ヶ条の傳は格有て格なしと知るべし　天然自然に法有て法なし

餘別　新家に情の立なれは云ふ条のとは遠ひ長くは続けるなし

△稱流之總供式

元祿新式曰　燒る燒る倒るもの　門堂に向へ　ゆるとも

茶の葉集　拵書

新書　發勺切字　治定なるべし　男三らん留有へからは

四勺目無用

燒火　柳　菅　樫　新　紅葉ホ　初折ホ　忘へし

但初折の茶引揚へし

新書やくに喫　以るし　蒸ちもむ　座元河

主張ノ口傳　其家火伏祈禱の為にするなれは中におのそも勺作に留やうにすべし　先文字つゝおたとへ　立音

相通とも記ふ不吉あらは用捨すべし　不吉の答とは六新編に附ての作る事の日　朝日

かくやくふすりあるを詞つゝお詠るへたとも禁勺之百負のうちまは火燒の字出すへからは又燒筆

吟ましやう傳有りるあに怪に吟する之發勺の留字　堂燒の留字なとしも水留有やうに出る之

第三を以字用捨すへおる之面八勺の内に留字　雲なとのやうなる深はしお勺をよく出ス

へしたし　遠くは七勺目まはかあらす出すべし　情字の法は水を出へし　上包は一重まして水引

二節につゝふべし　此外に一傳有

翁の水鶏の声名蒲川

江中の佳さ
辛のりや紅梅なども
其の対
あふきり日も
古くの様
一寒さとえ越人格
見知れハ先ゝ
涼しれ音も悩り
翁楽んらお出も
春風から　翁楽
言とも旅行こ
てら句親
済ぬくも有り
ゆとむ何てゝ
わふ君を見つけて
又も吃まらん
唯言の旅も
其日偲ひ比

そもそも初心へ一言か俳の法ハ心緩く甘れと詠ぬに語して
男なれ
翁の言葉に曰俳ハ乱るの気をうけて日恵なるぬ根に気氣
を守一なれとも中にも大事字留りに手に業留ハ上手も
まれのる也
俳ふりとてあまと云まて生へし文字の法さ巴ニ三巴と
仏道へし俳句拘へらぬあり。全。留の俳てゝ留の

仏満も御二了
已之の翁楽深
深山旅も
永ふ日まのせ
ましし上旅の
仕立出来て
見り

一アリスサニ曰

一流俳曰

俳なりしうれ好て生へうられ
乱る旅なれ啓め俳の様なりしうられ
名所乱るの俳ふ名ふそも青るも出雑もあるも
俳なハ方のはすらぬ中に小する其のゝかまり力を入
て一時すまハ俳の力法よく成て乱る作佳俳之乱るに
まけて法つのよし又俳曲をうつに大まと服との如
俳の俳かまても味やみんとすれと何きなる如し
俳句も文字留はあの名称まて在る道へ了手に彼

桜や遠第三
又と文法にて
一や語なるらん
又万葉集ニ雪
永本日より
涼の語なるらむ

かくの如くにて作意是をもて知るべし
第三留は 一字留二字留二留の外 当流にて用ひ字留
ことに留なしといへ共 集の撰者留りむつかしきなれし
要くハる語なき也へ法集に留なりてわろし作る

言の葉
ぬらんと留る第三やの字なくてハあるまじき也
奥やゆかしからん 月や出ぬらん 叶極之

ありのすさみ
第三ハ相伴人の心にて仕立べし
前句ニ言を縦といふ 言葉なるたとへなり
第三ハて仁遠波の文字をすへて留に作り之へし

發句曲
辛崎の松は花より朧にて
発句曲にして松の朧とは節なり

第三節
辛崎の松は春の夜朧にて
平句より言葉にいへ 言の朧と云節之

平句化
辛崎は花より庭見涼にて
此句は春の辛崎の 曲節なるたとへ

古今拘り新しく言語の意味を深しあり

アリノスサミ
第三とは字にて留る有 発句脇に第三を用ひて留り
のてにをはにしあるか前句に字をもて留る之 それを字留り
といふ無し 此の名留りといふへし 四季の名の名を留る之

第三
それし留の字 字より取かし 発句に志のて留りて
発句日
続ふまた言葉留ノ時 りする事何もなしと 一句と云切る也へ
または留よ 案ましと云 志りし それし 先述ある事ふして 言之

一条ハ一格
此等ハ古ヘ 昔ハ
手を尽ざるせん
是れもまら
然 詞る篇も
零の無限像
第三
墨なりなれハ 好
昔の定を忘れ
此一格を用ふべし

四句目
八句表の前に玉の始と寄す
六句表の前に会をり表す
四句目に至るのおきて
二句と遠びて句をなして花を連
これ大事の一句なり心得べし

五句目 季东
玉のまゝに寄す
六句表に至る表ハ
五句目に到のおきて
第三ハおほく大事に仕古格をすへし
第三の詞を心得て月を花とむすびてよし
到るのまなれハ除の月倒すへし

六句目 好
八句表ハ会をり寄す
第三のおきてなり
組の如く打添てすへし去れとも一定ハ思ふ
へからず

七句目
仕り寄す
四句目おきて
悟りの詞も組ハすへし定まりとて花の
六句の悪しき此の法あり左に至る五句目
の節情云之六句表の五句目に同し

八句目
表に寄す
五句目のおきて
大悟くすへし婦人まてしぬ事なし
四句目の節情と心得へし六句表の六句目
に同し

九句目
十句目
八を仕へし 裡の始まて切落の入る之面の術すを鏡に様ふ
云出す事は口帰る之 六句表なるとも八句目を八句表
なりとも十句目を 面目様まて 久しく事をおもふとされ
御説をまて頭て 読り 始より 恋なとハ 嫌ふなと云へとも
多するへしと之

第三
小舟さし浜 藻涼し 月出て 是ハ句格 数なし
小舟さし 藻涼し 紀月出て 是ハ第三の格之
月出て 藻涼しきと心う事之
世近の 柳色をも 面晴て 面晴て柳色をも 是数たしうる之
二の句の留
初霧に 浜遠く あり 雪山となし 是 霧のなしくも 之

○変化とは付和の事にて
おのづに悔すれば
事小事 嫌ゝ小嫌ゝ 家小家
とも付るべし何ハ何ハ付られぬ
なといふハ皆ふ自然人の
庠論也

久しやと皆中抑くハを付しの
拍手打て 諸新成就
世を思ふ編笠そつと下り置

後付

白惟子此皆郎と聚
投ふしの古ふ三昧を弾きして
投ふしの古ふ琴哉何ふ
今新語也

死活
皆ハ理屈
今新語也

夜無てを姫 鳥を人
とゝんる新を世に起情と
思ふ者誤ん者を人とゝんて
主用を結向するを今新死と云
前を人とゝんて主張を語るを
比喩と云かく者ふ姫を追ふすを古人ト云也

仝

和月も有れハちらく乱れるる
小僧新けに山へ云侍
天のなかへ叶ひぬ
ふかあんな君老もめつらしい

夜新文
七八月大ゝる円体の場付
そ人然の月斗なれと
つゆもこと意の處ら
さらハ月毎ふ有り
の魂を見ゝる者也へ
世に円体有体なとく
まとするハ論ず
是ら此あるハ南村ハ
去姫も此身に要し
こき拓とあらぬ詮哉
いふと変化と見へ
上まと思ふ人あり
何ふよりてこのかゝる
事をいふそや○

活 小僧も山へ有れる云侍

新高人此屋も此ほかげ
拓く屋を此細かくとは
藪入ハまさこのと母のおもふらい
屋を拓ふ
おもひかシヲリ也

聚シヲリ

前聚なし

悔を遠ゝて聚

田を拓る時ハ円体の飯樹て
飯樹て居れも円体を主遠へ
黒笠人此ハ名在生捕れ
評定ハ独活ふ東名菜の係事
生捕ハ
評定と聚
ある也

仝

筆も此横所ハ被ぬれく
犬も秋半ハ我無ふ様て居る
犬も秋半をとてふ起て居る
聚ふ起て居るハシヲリ也
聚ふしほりの事ハ何ハ無ふれハ有ふかゝるかの場れるか又そこれるか居る
ものゝ起る聚ふしなりハ自然の物をして自得の人有ふてハ誤るものゝ也

百三十六

裏

赤飯ヲ見テ
幸ノ字ヲ
ヲ附ル

かしの荷なら持て大和路

幸ひの巡て来るも時節之

拾ふ有合ふあとを手桶

更て鳴られ声を寄せる

前句を見て
幸ノ字を附ル

恋附

盗人を連添ふ妹の名を恨み

二句の間に少も

向ふを見て付る法

懺悔も致し入れ株ケ

むきむも兄の譲を恐て暫させ

前句に見立の

二句の間に見えて

且寄れハ坤しい千代の白鳳

傳へ名法意も法問經つゝら

向ふ寄のわたる家掛の上

とらせ給ハ五百石ふ比丘尼衆

全

直言の附

一代のとの乱れしや秋の暮る

ほろりと落る荻の葉の露

對附

花紅の印香を持出し

粗の住居も古の表見せ

八條目ニ曰八休
寄 志 親志
なるゝ意押出 類
お返 親取 意乱
右附ゐ下ニ者

一ち人

附方八躰 前ニ記し置ても余分なれば再び
言りしるは

一村の井をほりして籠細工

段巾の紙父の都は木兎
寄大八のこゝりしきる菜研板
おなこの紙に付し年寄

荷積も有紀有るの古屋お

板屋の漏れ沙汰大額
志 紀家をすゝる墨屋の貧子
戸柄まはある目包ちらたつく

余沢れ嫁入り紙もそゝ

一ち場

時分

ちお

着て居る日うてかくと稿のこ
親お 屋鞘のむき居中る鐙も居て
なるやうなる身のうへは秋

者焼く囲炉裏小稿を見て貫
なるゝ意押出
何事もいくそうて打まろび
つらの所へそるし ふつさ見

糊れ摺るし日れてはなれ
類 大小さして 秋法にて来る
如何さへさつて深な世の中に

流行うら延る芸居もきのふ切

小長の裏を近江小からし
お返 三ゝりあまる刀をさしこれし
常居るうちの高さよ

親りし節なもさせぬいをうし

時節

時宜

法象中へ叩うら揚るれ巾
なるゝ意
接拶 格
何の山れ云いるつけて麹を宮いん
されいそこれも彼雪の簪 紙本
親 姫見まり日は紀母の法しおくし
門ある家より松も四本

親相

麿はけハ鐙も笠もきかく

十年の生稼りし家身祖うしく
意乱 お智り目をゆるまての暇乞
味噌は煮るうりて有る雪なり

親ね

路用なしてよれ六条
光信を夢とたとへいふもくぶ

仝

掃問ね辰の刻よれ至るに近
師走を余隠りすて風俗

羅り目をいとせるに法かるに
態度の見るまと注ぎけり

面影

麿ハ鐘も釜もきらく
節季ハも待ぬ小原ハ来待て

秋の憐ハ知らぬ女房

云ふ変　正条
難り六祖ひとりの小路き
すぬけくつゝたりこ程
それかしとは御に鍋のもとに降り

仝

遅示河
女房を見て捕て打ち
見る子の眼りを巻にゆり起
海解り海ハ七日落絹

仝

以申百姓悪の様れいるしく

青ハ朱も気ふ志んと静る
鶏の青ハぐるやと鎧引うけて

麿ハ鐘も釜もきらく

故事

門院も長習のまふ本源ね

仝

秋篠や水山を浪の船まんて
静き人我落氏者の中

雪

いまやうりさし合なる龍ゆりしかゝ栗

為弁ゆ

十年の後

寺まのりこと算も船見れ

此次栗を得れば取るとも成家まは新世を栗にて

仲間り巴う無を抑へらせ事

軍まは日傭も具足かり合て

曲若は来るの化粧なれば例の法より思ひかへせば山

よせの地下の入合なれどもやすき物の目ゑんやれば十年ハ

生て一家の間りかへりて

朝の時は紫附写ふ込めひて

其事其理

五十の狗り世界一苦

来ずり締さすらせて事新

此所意所して

損しても我高りこうぬ風ら

変化

田乗をせしと宣るをかふふりて

小刺を罰す鉄の小差し

一 平ゐの所方小差ひ取り有 話向とは別之

遠近親疎の差別之

七字集と云
哉は頷
怪と咏歎
と疑の辞之

△二不かなの事

哉の字多用にして疑辭と称歎の二用と漢にも以へ
まへ倭にハ只加と訓せへし歟は疑の主にを以て乎
と哉ハ輕きをいふやとかとは同意に訓之志かる我
哀やなとも哀かなともなの字ハ大和の助語にして
漢にハ耶の字を用る之されハ哉の字五不も六不も
有にし古ねにいへれとも用ましは二不ともいへれ治
定称歎之深哉を加ふれハ三不ともいふへれと称歎

とハ二意一名之称は称員にして云とへるほの歎員に
して歎息の余韻なれハ嗟可惜といふことしはあと
哉といふ和訓も称歎と知るへし

△三不やの字の事

是に不多しといへと云ふ是は疑の耶と称歎の
哉と口合の也之第一疑のやといふはやの字の正義
なれハ一用にして餘術なし第二称歎のやハ多用之

花順やとハ称員花ちるやとハ顔貌之方三口合のやハ
漢文の常にして為道也。とも為法也。とも志うれを
也の字ハ勿勢のそまして切字にあらぬ時も有事也
秋風やとハ勿称によりてかなとも置し名にの也ハ
哉。ヤ。邪。と置るべし

△一二世のしの事

現在未来ハ切字まで見去ハ切字にあらねとや

五井河曰

三世のしの事 未まも夕。イ。の口傳にて早い。意い。唅まい。飲まい。イ
貞享式の通り ま通ふを切字とあらしてしまふ。ゆゑ。たに通ふと切字
と用ゆべし と世にて古称に云捨られと家家の尚用ハ異し。
去れかり見去 のしを切字に用
未来ノしを切ぬ意とし。見し。ゆゑし。四字の外に彼いふイキシクの助語
といふは大発 あれハまして切字に用ゆべきも未来の唅まし。飲
のるなれハ分れ まし。とハ意名まハ不唅不飲と云て多分の用まして
他ノに對して 論もむかし 助語まにかうされハ切字に用ゆべきの理なし正べて
やまり神式の 所謂まにかうされハ切字に用ゆべきの理なし正べて
心得まは見去 のしを切字と 切字の働をば文句に續かさる者と知るべし然れを
見せて四人まハ

主しを用ゝ
意ゆゑより
万ノ切として
逃し大秘

現在と過去ハ切字にして未来ハ切字にあらはれ
いまん色未来のしの字ハ東破の駒馬の譜なり

振舞ハ馬てハやうし雪見ん孔
見まて一理前通ぬへし

△笏の銘 三ヵ 諸家銘之部

笏

折てハ是非なく折まゝる理屈を持まゝ角も折ゝ理なるん

全

面の極ハ無頭にして田螺なる物ハ例此なり 黄鸝五人

・臥陀の銘

像をまゝ何うされハ夷狄に無とし心を不あらさる時ハ鳥獸に
都す夷狄を出鳥獸をも風を造化に拒へて造化に得れ
とあるを

枝に荷へいかの和尚ハ袋よりかゝれ
そにかゝれハ上人の風呂敷よりやすし

・同しく出

荷へそも砌りしかゝれ月とまゝ
拒に日と節る日あり月まゝも

・杖の銘　　藤山繼右ヱ山先生

吾ゆゑハ汝ゆゑ汝りハ吾りハ汝ゆゑ汝ゆゑハ

・助老の銘

こゝ恵の河やうかゝ世よりハこゝ実の持ちゆゑ

ゆゑ

杖ハあるハ切ハあるハんを此間して寒暑を知す

杖ハまハとて行る事なく憎ゑとて持る事なし　以来

杖ハ世上の理屈にして持るハ今日の理なるべし　白家

すべなれハ淋しかるハ淋うゝ物ハ持しかるハ

・きせる筒の銘

煙草入の銘

慧りなよし徒をましと寸

以前ハ東の

きれとは

[illegible]

稜ハ常に此ハ増加の干かゝ鉄ハ清さり猿ハ堂に此ハ

豊干の虎よりも恐し　なりて安しとも有

[illegible]

月ハ用ゆくもの用なし用なるにそ目をの友なるん　物学老人

景に此ハ心持のしく常に此ハ形さ見し　安老坊

・木刀之銘

人きまハまれも切れ思ひしやいの古持さハ木の刀さハ　義士　邑松　常之

・短刀之銘

三日月や有しゆりへそこゝ浮すゝ　[illegible]

開三寶ハ是三界
畳一本唯一心
涼しさ哉
な[illegible]
[illegible]
忘るなよ

・扇の銘
宝ハ三角是三界
要ハ一本是一心
涼しさを忘れまいぞよいつまでも
いつまでも涼しかりけり思ハれな　[illegible]哉

・団扇の銘
世の角もとれて廣がれ団扇かな

・煙草入の銘
嬉しさにしけむの香を吸ふて浪　[illegible]
返答をせぬ葉の香をりの里　[illegible]
月見しふよし[illegible]れもよりも

霞の中にも煙の中にもあり　[illegible]
色こそ見えね煙の山かしこ　[illegible]

・煙草筒の銘
[illegible]昼寝もあらず富士ハ煙草を燃れ　[illegible]
[illegible]煙を[illegible]て[illegible]れ
[illegible]煙を[illegible]なり[illegible]
竹の縁あり
嘯に風と霞と生す
[illegible]柳やけ筒[illegible]も　[illegible]

巾着の銘

おかしや袋の中に月と舞　　[illegible]

硯箱の銘

墨すり[illegible]の影を翻して[illegible]。
筆すり猫虎の勢を写して月に嘯けば風をけし。

相左角

[illegible]銘

蓋と此ハ箱より里深し[illegible]のなき

竜刀造筆筒銘　　文を倒に武をも咲せ
　　中を添に風雅をあれ

香毛の龍とも此れ月ならし　　菓金庵

瓢花生の銘

菓に[illegible]此ハ[illegible]取となる里

水に[illegible]ハ此ハ鎗を[illegible]
　　[illegible]ハ　[illegible]業[illegible]ハ[illegible]よりも
　　[illegible]ハ[illegible]よりも

玉生となりて静なるに[illegible]

瓢菓の屋もすゝらぬ冬　籠　　芸鶴園

重状袋銘　　舟袋　　[illegible]屋の
　　多より
　　いまこそや　　七十二齢　菓金

瓢の賀　　鎗に押へかゝる
　　[illegible]に押へよし　　[illegible]

文庫銘

ちと拾へし升の種尽せぬ哉　定信

枝折銘

まつ芽をのよるしや春雨で　以策詠

汁果ハ咲き来てこやもの山　定信

学如不及猶恐失之

骨折て咲けハ香し雪の梅　怪氏詠

唯右の銘

雲霞の自在に雲霞を空ハなりて世に明の里

楽しき常に明りかハ雲霞の雲霞を不自在なる頃

菜合銘

住化斎
朝伍

拾ても此の花何と花せよ。しらあやしくの玉ともあれ

しやとやせん鞍もあれ　春撰者家に生の住む世ハ

以後も家有香しを包む　浦の子に子ハあけて命あらんに

汁菜ハ老をと花し阿を都と

筒銘

西京屋朝

世の中の籠をいひあれ　同居り摺小木の音としられ

同

孫に於ても此て寵にあらざれ　席に於ても人をうらこれ

・同　仝

月を用なく花を用なし　用なくてもまた月むのとも

・同　仝

肩をうけて三十持　数り御詰の眠りをさまれ

・同　仝

花をとるにふまなく　是を置りこゝ給なし

此をもて先立て笏をうめるものに

門を虚にして美理を通し　所に実にして風姿ゆゑ

・如意の銘　徐風居

供ふる諸る有名なく　従ふり諸ふ有名なし

・笠ノ賛　徐居

降るれば　ぬれて笠じかはれて又

照るれば紅葉

・杖ノ賛　口

携へて路頭に入らば松葉あるを添む

・三辺猿

見されとも志れ蒸りに刻り
見されとも月れ心を照らす

明月中のく頼れ也ゝ也猿の耳　子琴

・水音亭記

涼解く
柳翁晴て　心も澄ん水の音　古梁府
秋風下
見こり里

・硯翁蓋出付

名ゝよせて河松ゝ蛤れ浦涼し　里和

松の蓋り乃扇より　咲　仙行

贈分平居文

四時の多景何まをかゝ見ていふべきされと
居ちのなよしもあれもつまなくいるひ
かゝく只照なの姿といふ

縛の中にうしてくそのあ里　也有

とさて下わそしに掛たるしの自里あり来れ
回りしれとまへし方れ子苗れ秋れ　来るれ
名ハ大根引とをきかへて見よ一面四周にそらうれ
あまそ白のつなかをいふへうらほと縛穂の一縛に
すきらうしておくりあとふなせり白里

そくさいの粉ひとも縛む　濃緑れ柿　去来

花し

柿ぬしの地分かゝえし　猿目　うれ　支考

百五一

猿猿
鳥ゆるそ
花し

△俗語常に覚へきこと

・手ふてのくし

小て止メハをハてもかゝんたるさへなるをたゞの手にハしかり

・おこしの頸

糧や綱釣の糸なと生るに頸るゆへよおこしとしれ

・去嫌の頸

衣雪や竹田の和歌夏なる月松枝ゐるも去へし

まゝ頸にて表斗りを嫌りの俗語にてハ七ツ去るへし

紙のもの文字ハ身二ヒ嫌ハ多ク候ハ表まうもん
追迎も拜しそ来も二ヶ嫌ハ下陰も同しへるてぞ

用捨のこと

情よ怪無礼世ハ少る罪科天災不明不孝ふ忠義
近代の老人の法名官名もそれと志れるハ上の名まいむ
四民とも今いる人の名を出さ家の祕事家家の業
定りてある意の名ふきをつけよ祝いの坐席追答の時
神祇と郡民の御授あるまさ出者も無をのそくへ志之

是程まハ堀川百首とを引給ふも二十年来ハ世ハ

右三首古実のこと

送りたやかさ称を紫ふ家ハ洞鐘の一解鹿の左を手
垣于山霞の谷ハ夕けむり杉さり衣玉の拵柳
何とをとふつるハみ衣着衣金のきゆる事ハ我まうもん

右六首ハ祝儀ハ思へし

祝云ハさくのくいぬる飽いと夜ひとりふさひ嫌ふたへし
いまの新猪の春の又かへり候やもの焉り追出しれかね

新豊にたく火のうまさ行つゝ年あき行もゆる御れ器を
夏あつまはざんけん流へ夏そさめ陸にまけのく落引はいむ
追昔より苦しき沼に落迷ふ祈祷しまりけるを思
え後はいむは瓦山秋冬月和ふ蛙のまり松を芝ず
右の家ゆるにをぶへ狗中より終至へし

△追文教ゆ

寄人談
桜の実山の木の月や身の楽さ　和尚郡山　宇古
筆の墨志ろくて黒し簾の蝶　仝
雰雨や木承法ゆき止めけりき　越福居　伸也
四季の京月より見る池のほし　宇古
桜のみの老松蔵を仲れ面　仝
けさたんとのめや菖の冨田酒　其角
けくみつてつまて待てまつつゝ草　也有
桜のこゝ苦よ其はよく身れらんさ　絵江

△切字の格

心切　いさらは雪見ふこ行ふ所まで
中切　猫の恋やむ時国の掛り行月
接移　人ふ家を買ハせて家ハ年長
下脱　幸崎の松ハ老より続まで
二字切　黒火ちけ。よきあ見せん。雪丸け
三字切　子供らよ。鼓子（ヒルカホ）を咲ぬ。所もうん。
二脱切　夕まも鶴まも法ハ所れ　を

三脱切　目りまた笑　山子観　たけ松矣
を道し　まくてもある程よりも我蕃　椒
小道し　桐の木り鶴　啼ある塚の内
大道し　りまを渋海の人と押しを名る
玄妙　まもやゝ楽し　起調ふ月とも見
押　何の木れむともしられ白ひ引
抱　夕顔や秋ハいゝ何ての。難しの程
世名　四方より里を吹入金て　鳴れ海

勾續　忘れすぎ小林の中山まで深め
追答格　尚帰りあり此は墓の葉学
即興　京清もむかしの住まへ七兵衛
画圖賦　降るとも此極る日は篝と笠
畳字　寧（ナラ）楽なるへ七堂伽藍八宝法ゆく
拈

七仲集
古人切字の此條目を定むれしは神仙の教を法を
礼させましき為之上其の上は切字なくてもあるに成る
事のみしかす貞室翁
これいくとはかりむのよし仲山の如しとて

アリノスサミ

△やこの家の殿勾
此格にて有一ツまは名和のやを上まで見て見と留る字まは
上の字を見て見る白
條やもし渇れる京の流の格
此ゆの字後に生てまもあらば名和のやハ見ともてとも
留るべし
夕息や林にいくしの瓢の格
此や林にのぞの家の抱まで見て留るべし

八條目

中のや　哉や（ト云）八字メ有　角ノや　目口字　そのや（ト云）のや

此三ツハ切字ニ用ユへし

惜花や此花吉野にとかれ

是ハ上ノやに下ノやかゝる

哉や　梅や桜や　角のや　かれやとて　そのや　呉梅や

雲や霧や　折ふるやとて　お梅や

大鏡ニ曰

凡やハの清名不用語法絶教年月日人名

一季合躰是等を始として十ヶ色のかわれ

やハやなりやなりまとめてゆかれとなく

例

風や志るちる錦えんの一筋の風　宗祇

是ハうるかびのやをとる。とむすびすびて下にかなふとも心得へし

例

園梨や松やゆかんな夕へかな　雨を

此二つのやハ離のやにて下をとるの梅ふあつのかに先とるとふかけなるやく

是ハ［や何ヤカヤ］かやといふ心かんといふ心の名にて字のなるものとを

いかんといふとて夜梨や松のや何やうやいかんなゆゑにかぬとふ言るなど

かるくまさりぬ離のやく

△附会嫌弓

アリノスサミ

・用附

用付とハ常々を称して云用を付る之古来より以ゆとして
弓に引と付行なるひくなとし付る様之なる弓に行と
付来引なと以ゆ弓を付るハ躰付にあらてよ所

・こしろ附

こしろ附とハ洞に薫と付茶に袋と付る様之これらを
古来より嫌ひり薫に洞袋に茶を付るハ也

・前句の縁

是は前句をふんしよく何事にても縁ある句にあるを哉
付る事和学の心得ある事之句

ちまたある人にも立寄り度そて
抑紀まくらより竹になるらん

なるべく付る是と前句画源氏といふ文ままある人の度々
立よるといひありと付るまて通したるへ

・前句へ立寄る付句

是ハ何事も能付らるゝもある所前句へなつみたるを云へ

さかくしゝ種も揉ても
縒細り光は絲の筋なれや

・同字付

是は前句も附句も同じ文字あるをいふ是非もて字ん

秋の稲も招へて時の世話しくて
去との月なぞや西の空

なるべく付る題を時の世話しきまゝへ

・おろを借る付る

是ハ一ツ前ニ出し前ニ引合せて言ふ事ゆゑ
なれ是し

下向まれ着てくらまや出れ

蠟燭の火をとるも却り候し

是ハ何也へ蠟燭の却を候しまといふ事ゆゑ前ニの
出れ候まて中ゆゑ之右ハ来ての付るいつまも古来
より嫌ひこさる事ゆゑ中まも前ニとうふ事ゆゑ無事なる

是し

・倫也

是ハ人のりとる事之何のなるもおへすまて何とかへらぬ
とよしやすると故に倫也を嫌へり是ハ去迄の二何り
を倫也といふ事おこしへ今意のりとる事之俗り三ツ
引とる之云戸乞ひ付と以ても是之毎方へ戸乞ひ我
罪犯なるゆゑなりと之を倫也とハ生とへとおの花り
身を付るゆゑ又楼ハ身を付る数之月ハ雪なとハ

白紙二

百六

△捨仮名

ゟを出ふ捨りなを行仮字をて付る人行り鐘の鳴る
時風の吹り松なとし書り此とみるしきゆゑ此行仮
字なくても鐘のなる時とも風の吹紀雲ともよまれ
ぬゟ之捨事ふ捨りなハいらぬ事にて其又それよりハ
清ゟなお鐘子の鳴る時キ風セの吹り松りなとし半
たるも有皆根元の事をならひ得さるゆへ之
ゟを手清ハ
鎌実や濤れ家もとしの書

其もそや鎌つく家に濤りけ案
かゆふふ仮へし躰字を志名に半用字を仮名に書
へし躰字とは御のぬ字之用字ハ御ん字之鎌つきと
以へ行事になりて躰之 実の字不御 鎌つくとしへはくの
字御之濤は躰之と所るハ用之たとし濤の字我
かくとも捨ゟ字を濤りと付て書へしとなり事あり
仮名に書もよし又時宜ふよりて少のお長ハ付ゟ
大ゟ以を新しく仮て其ゟ事ハ全てはうらふへし

△仮名を書法

師曰下の御く字ハ必捨ゝ事を書之たとへて朝霞（カスミ）と
以ては其字正なりて不御而捨ゝ事ハ不及之胡霞（カスム）
とよむ可也霞の字用字ハ有りて御くゆへ胡霞
むと字を添ゆる法之三字に字ハよむ字は一字付る
法之四字ハ讀ハ大なる二字付る之 耀（カヤ）けり 彩（イロト）まる
の類なり けるの反くなり まる此なる所り
かやくいろとるといふをのべる之 其外右の法ハ
准して考へ知るべし

△姿情の傳

秋風ハ薄吹ちる夕ア云ハ 能明
秋風ハ薄吹ちる夕ア外 芭蕉

・連歌は情
・俗語は姿

・宣元家蕉の姿を心ゝ得る事
耳りゆく涼しさなる傳柳外

・俗語の意を得る事
ちる可ハちりて捨やむる悴

姿なし　おるなら腰巻をもおきて蓮のむ

姿なり　おら腰巻をもおきて蓮のむ

時見うすんでもなしむり　妹

喰て生れふんもうて　楼うね

前章の妹は推量にして百の上に姿なし　後の楼も又情と云

先にして姿と書すれたり　然るに前章は中の七字字ほ如是

てもなしと云ふ人は半紙の余情を云ふ人は下の字字

をもち楼と共にそこにおしめる余情もあらん

△俗語に仮名語ひの事　頼は白圏を照し　京は黒角を照す

い　いきく　鯛（タイ）　鯉（コイノ）　類

ひ　ひふへ　葵（アフヒ）　雛（ヒナノ）　類

ゐ　盥　生らゐは器の時也　或はまあらぴとも　紅　くまるゐとも　又は井とも

ふ　住居　山のきてすまゐとも　雲のきてすまぴとも　為は不動字也

む　眠　祢ぶ里は奇事也　祢むりは平語也　侍　さぶらひとも　さむらひとも

(ひ) うなしぶ。ね 可言之
うなしぶ。ね 可言之

(ふ) 瓜 うりを。ぶすとも

(む) 旨 うまい。むまいとも 此類は故実也

か 通 とおる。粧 よそおい

を 直 なをる。姹 たをやの 此類は故実也

わ 男 ゆとこ

ん 瓜 ゆうし 桶 おけ 大 お 尾 お

を 女 をんな 嵐 山をろし 小桶 小をけ 小 を 緒 を

わ 和 ゆ 同し上と下に用也

は 日 ハ 同し中と下に用也 三輪 此類は文句也 みをと出し

え 消 キえル キユル 杖 ツえ 笛 フえ 机 ツクえ 此所は枝の え の字と云ふ宝なりとなり

へ 更 カヘル カプル 元ゆふへの 若なり也 業 えへ 和 あへ 故実也

ゑ 声 コヱ 楷 コスヱ えトモ 或は 未 コスえ ハ すべとも すゑとも

つ　とづるとも　つま通ハぬハし北宮也

ち　とちるとも

法師　ホツシ ハフシ　おろしとハ口傳也　雜 サフ サツ　拾 シフ シツ

「援（ハ子）字ハ古語にて右の仮名なれよし

「文字ハ見るゆふ（様）ことに出へし見るゆふ（様）ことハ信（ノビ）てまるし

或ハ言語に字よふ（能）てとも出へし字よふ（能）てとも縮（チヾミ）てまるし

「言語ハ動き　文字ハ動かれ

△　附字手本草字留

見くるし　萩のむかしみたれて

傳に萩のむかしみたれて見くるしとまもりて本草をあまたれ和心の内て留めてこれハ目に楢葉いなはそもあてかくの如く上の七字字を字留まして留れハよく留る也近して留るハ和心の心得ちかなり之

下の字に留

とくてかり　親仁和寺来りに

日行さきひ急御　中かり

傳是ハて留と同し急仕に日行後ふとあり上に近して留れ之

上の字て留

清よふなの里　家風を猫の志れつて

傳に上の字に之をるとなて留れ

下の字ミ留

向ひの山にし　生老病るミ也

むうじの岸に船のり三角
曖簾の間り錢をよむ三角
木すえに鳥の梅鉢咲ふ三角

俗にも両角は押へ字にて留給ふ

押字　ウクスツフムル　まゝ留る之

これをのてに筆の事

ケ　筆にてはまゝ酒をこそかを

セ　肝をこれを洗ふせ　雑耳の時鳥

テ　墨　頭にて　煙とは　こゝ

子　云の筆に骨折らぬこそ　ふ得ね

へ　涼あれはこそ　人もこゝや得人

メ　親のある内こそ　人の己ならめ

俗にこれをといふてはへけせてぬめまゝ　右文字を押へ字にて

△賦物の事

連にては五ケの紙　跡山松舟人

筆の所可定りなる文字あり　俗謂にては定内

らば真ある字をとるべし　急なしにする俗謂

まは必ずる程し

上何　何下　一字　零部

三字中畧　日上下畧　四字上下畧

五字上中下　一字借字　二字除篇

除冠　他添

賊　花　何

水無月や鯛は何れとも埴くしら　花埴

何　皆　雪皆

兎も角も明らかや雪の枯尾む

三字上略　樗

已の火を木々の蛍やむの雪

四字上下畧　坂

象深や面下面施の合鎖のむ

五字上中下畧　蒼

先形む椎の木も何り篆木立

一字借音　位

稲妻や闇の方より位の事　位

・二字反音

敷公帰や不尺のあや先科　杉

・一字雲郡

食鮭も宮也の痺も食の内　酒

・二字深篇

腰長や露脛ぬれて海涼し

此分功者いろ〳〵偏ある事し

二字反音　三字中略　四字下略　八千句連歌

の時も也

・紙何力　又　四字中略　上紙といふ

鶯や井の子蔵を老と偏

傳何者多の蔵を云て蔵力といふ也四字

の中略ハ鶯を向と云ふ人の二字を略する

也

賦何守　上紙とする

散りませてあや織り瀧のむしろ見ん

何れ紅葉のむしろを見てむしろとすると

紙金何　下紙

山桜　ゆきてもとやなく鶯

傳り金山と云ふ山ハ何也

紙三字下略

鎰金を生て出さんたり鎰

傳かつをの三字の下を畧して縁と云ふ

紙一字添冠笠

苗代を見て居る蔵の鶯の鶯

傳代の字り一字冠を添る右一字添冠之

紙一字除篇

木枯の都へ入るや鍄う里

傳魚の篇を除て京と云ふ

紙三字中略

むさし野やちぎりし鏡山
仝 鏡を中界して納まる之
紙一字字取
夜の花は粧ふ風月有も一興
仝 娯と香し字 取すゝ之
賦仝鄕紙の連歌
未仝 湯水家は未を志せむ あら何

庵仝 紙子の襟は庵織の梅
付仝 鶯の淵子も見らとうけ来て
仝峡 降と命ありし咲出む
桜仝 七種やむかしの人の言あれくまて
仝柱 あつさる梅を経り梅折り
仝樞 七樞は知られ白雲清請
仝山 山へ庵の御の入門さあ
仝扇 萱の月扇風は照てむ紅葉

蒔り納める秋のたりあ

傳十分の表は右武也十分なるゝに配當の紙
あと云る同字名に六分ゆるすく
十分右武の表の面顔は裏の八分目を云
なりすると
蒙恵り下の分をとゝる時は弥仙の表七分
にするゆゑなり
賦何力と紙はとゝし出有へし此紙あの

事は神祇より出て祈禱りするゆゑ也常の
紙はなし紙あとる時はかれらは一在の
紙は清浄にすべきゆゑ一之立甫の風は
常の紙はも紙あとるゝ貞徳流はなし
紙の字口傳

賦物

貞徳云連哥小六五箇十箇など紙あけまど

紙袋ハ百韻なるから紙言まで紙する連哥なれハ
端作りとも紙袋之連哥と半つきこと云
蕉門まで紙袋の同法なしされと名得のゝあ
り大略を記す

たなひ名

賦袋の文字再ふ立字ハ面を嫌ふ紙しあの
文字さるまりたる文字とてもあらされハ五箇
なとしいふるも紙し発句まさつひ奥あれ
文字をとるへたとへハ山桜の発句より犬ととる

へうるは大きは山まもまる故之婚の矣かまて志ある
屋し餘ハこまふ准ふ一字家顕二字返音
以下百韻の紙袋まハとるへうるは云云

・賦何衣連哥

年毎まみまとも茶ハ桜の頃

・賦何袋紙袋

あれ多ふと何ら何ともな世々の事
これハ上紙といふりの之端作りの何といふ字ハあそ

くのゆうなるあまて勾中のまたといふ字を呼
そふるなり里其袋とおもるあ之始の勾は花衣
と取るなり

猿何

天の川水若からん何るこゝ和

是は猿若と取るなり餘は准へ考へし

一字露顕

なきかしら寝ぬは淳世の杜宇

果は勾中の寝をきふ和なしるなり

二字反（ハン）音

籠て飼そらねもなし　時鳥

果は勾中のきすをこへして杉と申なすなり

三字中略

去里来る年のあ西之や美千里

是はあ西之といふ字の中を異して綱と取るなり

三字上略

蝶鳥やちりかひとまるむ白雪

是ハとまるの上と畧して花と云ふ

三字下畧

月に毛と川鶴ハ月数のなのめの形

是ハひとつの一字を畧して今を云なるべし

四字上下畧なるべし雑波は上下畧せし

庭となるやうの事又五字中三字畧なる

へハつそくりめといふと中三字畧せハ瓜となる

たゝひ五字借といふ事「白雪ハ山の額の化

粧かれ」これハ句中のけを毛とせしなる

二字除篇

龍門ありて都へのわき鶴の矣

是ハ鶴といふ字の魚篇を云て雪と結ぶし

他添

鶯やよむ音毎ましね鶴目

是ハ毎の字ふ篇を添て梅と志るし

木因曰
紙和歌ケの大事とし云
山路 木船人
山ハ行勢 路ハ住居 木ハ其日 船ハ玉津嶋 人ハ人也
是極秘傳之事ニ云ハ

千里独歩ニ曰
一紙和の事 其歌ニ云ハ志源秘の事ニ云て悩なるゆゑなれと紙詰ニ云ハ其歌より借
用ひて無ニ云ハ事之上賦云ハ中ニ云ハ結紙ニ賦の字ニ続て何といふ
字則爲ニ云ハ事ニ云ハ上賦之下賦ハ賦の字ニ続て無ニ云ハ字を定て云ハ
何の字を出し 故ニ賦何笠紙詰ニ云ハ其歌と結紙を得る是上賦之結爲ニ云ハ
桂樹菅竹花結なとの文字ハ此ハ桂笠竹笠 紙笠 結笠と云ハ下賦ハ賦翻何
紙詰の其ニ云ハ何の字を出ニ云ハ下賦といひて爲ニ云ハ翻なとの字ハ其ハ翻也
いとし身翻網と云ハ又一字爲ニ云ハ二字也 三字中略 四字上下略 五字上中下略 一字隙篇
一字添冠なとし云ハ爲ニ云ハ日を火香と蛟と云ハ 返言ハ出ニ云ハ 蛟 夏を総中略ハ 雲を紙
上下略ハ雪ヲ抗上中下略ハ花菖蒲を細ニ云ハ隙篇ハ鍋を雪 添冠ハ田を雷と何ニ云て
も無ニ云ハ文字をとらるゆゑなり

五義
篇先へ引んと云ハ事
六月今日
序 門へ入る事
今はし山の

△和歌の法

長歌 短歌
是ハいづまもの文字七の字 五の字七の字といひ
つゞけ句数の多かれ意ニ云ハ事ニ云ハ七と我
りてとむる也 但 長歌ハ意をもつて法ゞけ
短歌ハ詞をもつてつゞくと我

ほとゝ歌あれ
曲 とゝまる品をいふ和
抽ほつゝの歌ハも
流いひ借ニ云ハ事ニ云ハ
嗚いふるの歌
ゆるをもつて和ニ云ハ同し
様なるをもいふ歌と
ゆゑへし 短歌
秘傳ニ云ハ有也

旋頭（センドウ）
三十一文字の内へ今一句ニ云ハ事ニ云ハ

はしかしこそこなるかけふむかひのて
見るときまゝしきしをしらぬ翁りあふ
こゝちすれ

混虫

三十万字の内百ゟまさる事をいふ
鶏の口のゆふかけまゝたちりやすき
花の名そうし

折句

四万字あるあの名をわるの上毎にしてよめる
事也

題琴たまく　小町

ぴとのこともどきいなるをばなのまなん
まつゝみよりしぺてはくるやも

沓冠

句毎のしたにあの名をふくしてよめる歌也

題

合せ薫(タキ)りのおし(スコ)　仁和帝

一 あふさかもはてはゆききのせきもゐす
たつねてとひこきなはかへさし

輪廻

上下の句同しことによみてことをいふなり
としめともついにいろはゆくちとるん
しろともついにいろもとあらを

傍題

なとへは月の影なるを題とよみたるをといふ

打越

本歌とちかき本歌の句をよむ事をいふ也
君か代のひさしかるへきためしにや
かみそうゑけん住よしの松

落題

題をおとしてよめるを云
題 松かけの月　和泉式部
さを鹿の秋のねさめをはする小松

そしよつぶふもかくまざり今里

△ 蠶勾の傳

アリノスサミ

蠶勾ふなりたる勾とは。一勾ハ二ツ成て蔵忌せざる勾
みは鄭者蠶勾の鄭ふそれたるは蠶勾ふ行るは
領域を行ふ事して似域の自勾とするはぬしなれ蠶勾とそ
忌むべし。蠶勾は先勾とせんと思ひて敵身ハいくの中
鮮の毛れと思惟してかりまも不在意の事にしきと也

論傳

蠶勾は其地異け始り一陽生しるゝ是を地得之故に
蠶勾と云ふ然れば長さ立てる根よ寸ハ混沌未分
の時唯定之一筆生ずるの形也 蠶勾は其外物なし
故に切字を用ふと云ふ

八條目

鄭夕に手入し菓や名古川 末條
名古川 雪何れとも鄭夕手入し物の名也と成ハ末條之
えり捨て手入ぬ菓や名古曾山 初條
名古曾山 雪何れとも撰り捨て物の名也唯ハ初條之
四書目にて手入し菓や一の関 正條
一二三と條 物と撰ふ先第一第二第三とする是者別之

不拘ふ拾の印書目ゆのかゝ名をもて故印と一との字書と實
とのゆひまて菊れ撲の餘情も望へし

仝

春の切字の事 前ハ其地の句行て陰陽を分なり
春の切字は連続せに一句まて前一筆の詞情我に出る
夜切字まて其地をまとめなり万物悉く陰陽
備ける理と知へし

○

春の色 春 子終の所
春の仕上し江戸のとり詩所
春の色 江戸 都 京 いまも
春の紅の事は志水ぬ 京 俗り
地名まし 先所の俗所 行
桃の花 逢 産所
都は何所へ移らせまし

△ 表八句の傳

表八句は人の面の如し 眼耳鼻口の意所正しく菓和成る
とましとす 一所もすちりやうみたる所何らは 碗に魚と成へし
女供 陳 茶花 おも 立まなるほとて 宮しからほ 紙 天教 立
無常なる我 林 せしは 表の内は中すらこふ 婦しなるぬ
やうにとの用意也

アリノスサミ

洲傳曰
八句面は
天地人
陰陽 玉ノ姫
玉神 太神 君姫
食住衣と表
すなわち

六句表は
天地人食住衣
と表しまく
玉の姫 君の姫は

本國曰
春の句は陽也 天地 冥神 一陽 春の句しるを 無るによりいうまも
せてるく 立 所 行 根 まするを 是所 心之 俗は 又陰也 不行 陽 小 親て

有所に陰陽を出ふすると云はれ之の陰は陽を志すゝ之の
なれは春夏に能名入天地和合とすへし第三は天地寄りて
人の所まゝ始る心之さり程に春夏の程を目をかけ之の春夏
するに於ける事へし是天地人の三才也又或作る者春夏は宮人
程は春夏第二は相伴の如しともいへ星又春夏は親程は子
第三は知耳のことしといへ星かくいえる心は春夏を親と
して程の子の夏を知やのかけに至へしと他家を居るのな
まゝ程の縁をあらさぬ程に第三は一夏をあれてすへしと

四夏目は天神の御名代分なれはいつまもかゝく至へし深く案
すへうる所の宮留りは好ぬ事手に案留り終るへし梅雨分
は新しかゝると星喜表有るゆは陰陽の心之四折にする
事は四季を表して之
附表に嫌ふ宮の事 昔古老世命 白髪我齢のたけり
の歌は元より定てる述情なれは云に及ぬ所は淵芳
生徒然古人の名曰古事の報尊て知すへうる所是主頭の
掟之論語は主頭を父としてする事なれは右之所

神の漆ニ小神所居ニ載ニ小所居鹿ニ實ニ于鹿
鷲ノ實實ニ鷲ノ手ニ小滝滝手ニ此鹿ハいかれども
有へしいつまも面の内の付ニ小すへかるにまあハ神の漆所居
の載鹿の實鷲の實手ニ鷲ニ濃と云さし定りたる
名ニ有れハ之たとひ古記ニ書ニ有るめ氏の称有とても
必ふて給用之
此ハ人をしきは御傳の中ニ有ニ異ハ趣し

△さし合譲頭新製

置山も風を鼠も海川も沖津鉸も三ツさし案なりし
馬車虫魚菓酒飯と餘一座ニ二ツと定へきなり
飯鐘と木魚の呉名にそうり春雲の呉体数を定めれ
龍虎を鬼も手ニ小一ツなり呉名呉体ハ数を定めれ
かうそや海ノ虫より山頂を手ニ小一座ニ一ツ之ニ有
房燕柳さくらを鶯も菓も手ニ鳥も二季ニ二ツ之

度植そ河ろ紅昔志り袖も多も俳もいじ久へし四ツ
泣く笑ふ照るも曇るも植刈そ蒔るそ起るも西ハツなり
目と鼻と耳口手足此数ハ折をかえてハ皆も有へし
細ふ魚明子ふ鳥やきたあ我栗山子も海苔そ植あふ二ヶ
月次の月ふ月影三ヶふ〻照る月と月ゆゑ去楚うし
百顔ふ雨ハ春折四ツなれと雪ハ表り八ツと社さけ
子此日ふ松更科ふ月のゆもをふよ照も去嫌じなし

△同　古式

月ふ影をり蒼や可り里弓失ふ弱ゆ付ゆ嫌へあ
明ふ翌日手ふ持極る足ふ踏河ゆむと云ふも付ゆ嫌へあ
鼻ふ叫えいさり火ふ蜃末ふ丁楚詩ふ掃詩付ゆ嫌ゆあ
名所ふ寺号て望日本や名字名神嫌ふ寺ふし
いりあ雪や火の為をも此降而家の道ふも嫌ふ寺ふし
影ふ陰星り月日やな此所ふ暮夕の二字も嫌ふ寺ふし

馬り船源や衣類や糧人に生れるなとも姫に并ふし
野に原り閑て長宗公に今に七夕より月二分去そかし
泉に緒や衣類に砥箸り筒木屋に雲繪二分去に今り
室に雲久かるり魚屋るり卦雲に今りは二分去そかし
生り死や幾日に日次にこりたる国家の仮名も二分去に今り
吉に今り起きみちて死や凡に凡呂源に木源は二分去そかし
火にのゆる燈て薪月に寸きはゆへ凡に油二分去に今り

そのたいに婆や多て反古なとも都に生は二分去そこのし
食て飯米て多ちかて弱に馬籠に八幡三分去至し
父母と孫父孫母なとや賀に祝多家に三分去なり
凡呂に凡炉匂い小佛屋や喜多蘭の包とも三分去へし
急て紙鶴屋につり針舟にのりさけり月戸は三分去なり
鶴に今鶴もし鳴きりの春に春鹿に鶴鹿も三分去れなり
衣季や牛田の烟り蓑なとも月まいまつら舟も四分去り

堂にも恒にしかりや橋に柿石に岩苺七分去りなれ
山川に帝紀馬に一疎なれと弱にまくさも七分さるなり
人足に道具の河や火にこゝろ河に御家ハ七分去るなり
神にみこ帝に門や大君に公達なれは七分さるなり
佛の字や白いにうほる三字仮名に稱も七分さるへし
綱に河何海にしらなれは罪に世く渦に巴ハ面嫌へれ
籠冊に鶴や眠に祿ふりの末うたひに能ハ面嫌へれ

茶翁に瀬丸文に恵や京男堀海面却らへれ
妻に妹こゆきに京や河に下に旅に旅鶴ハ面嫌り
殿門や王星神に注ましら康約車却らへり
餓鬼に兎經に番經塚に墓禪に悔ハ折を嫌へり
三目に菜鏡や笠に灌子なれは折燈に桃灯折を嫌へり
物に病ましくさに蓮子油燈に墨に折を嫌へり
君に代に佛宮や勅使にこゝろよりし伶人に音折を嫌へり

以下全て
紙
白